糸島市立

伊都国歴史博物館

紀　要

第14号

糸島地方における弥生～古墳時代の赤色顔料
　墳墓における朱の使い分けを中心に……河野　摩耶
　　南　武志
　　岡部　裕俊（1）

ヒョウタン形土器小考……平尾　和久（17）

「平原から黒塚へ」に関する疑問
—平原鏡の観察結果から—……角　浩行（25）

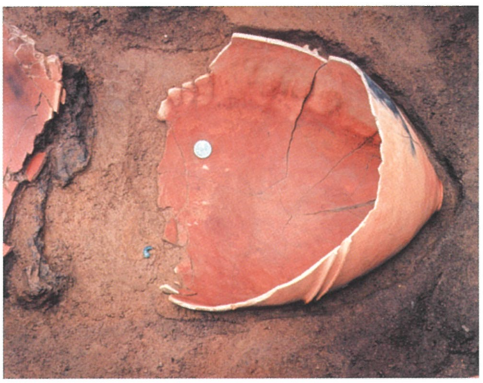
怡土城出土の瓦塼類に関する一考察
—金龍寺所蔵資料の紹介をかねて—……江崎　靖隆（35）

2019

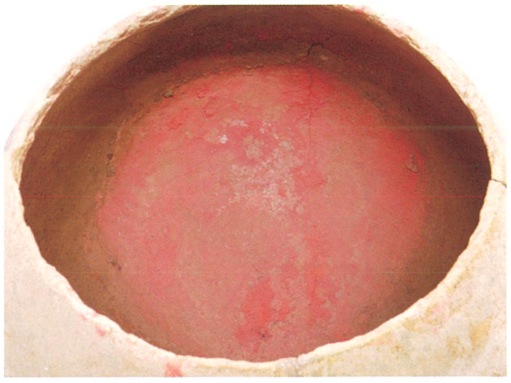
①新町遺跡 24 号墓朱付着人骨出土状況

②長野宮ノ前 12 号墓主体部掘り下げ状況

③三雲南小路 1 号甕棺墓甕棺片内面朱付着状況
（九州歴史資料館所蔵）



④三雲南小路 2 号甕棺墓下棺出土状況
（九州歴史資料館所蔵）



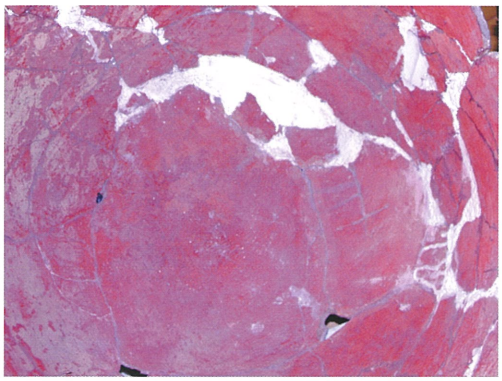
⑤泊熊野遺跡甕棺墓下棺底朱残存状況
（甕棺は糸島高校附属郷土博物館所蔵）

⑥井原ヤリミゾ遺跡 1 号木棺墓頭部の朱検出状況

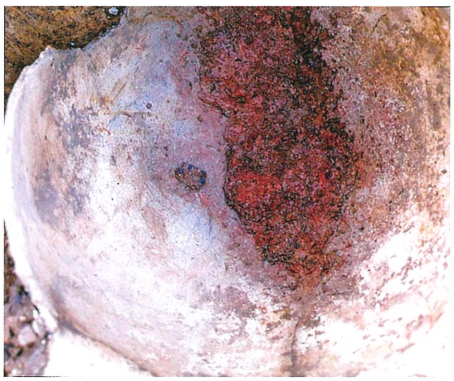
⑦東二塚遺跡甕棺墓下棺底朱残存状況
（甕棺、画像ともに東京国立博物館所蔵）

⑧井原ヤリミゾ遺跡 2 号祭祀土壙
壺から流れ出たベンガラ

巻頭図版２



⑨神在５号甕棺墓棺内ベンガラ塗布状況
（甕棺は糸島高校附属郷土博物館所蔵）



⑩本田孝田遺跡２号甕棺下棺底ベンガラ塊
（甕棺は伊都国歴史博物館所蔵）

⑫山北井田１号墳１号石棺内赤色顔料検出状況
赤色顔料を壁面に塗布、上半身に散布

⑪東五反田遺跡箱式石棺内肢部のベンガラ塊

⑬千里大久保１号墳箱式石棺棺内
ベンガラを壁面、遺体頭部に塗布

⑭長須隈古墳舟形石棺内赤色顔料残存状況

⑮鋤崎古墳後円部横穴式石室

序

伊都国歴史博物館は平成16年10月に開館し、本年度で15年目を迎えました。当館は、糸島市内の遺跡の出土品を中心とした資料を収蔵し、糸島の歴史や文化財の展示・調査研究・普及啓発等の事業を行っております。その一環として平成30年度も紀要を刊行いたしました。

内容は弥生～古墳時代に関するもの３編、古代に関するもの１編の計４編です。「糸島地方における弥生～古墳時代の赤色顔料」は糸島地方で弥生～古墳時代にかけて多数出土した赤色顔料に関して出土傾向の変化や一部の朱については科学的手法による分析結果から産地の推定を行った論考です。「ヒョウタン形土器小考」は玄界灘沿岸の限られた地域から出土する「ヒョウタン形土器」と呼ばれる特殊な土器の性格を推定した論考です。「「平原から黒塚へ」に関する疑問」は平原遺跡から出土した銅鏡の鏡笵再利用の可能性に対する疑問点をまとめた論考です。最後に「怡土城出土の瓦塼類に関する一考察」は怡土城跡から出土した瓦塼類に関する新資料の紹介と新知見に関する論考です。

いずれも糸島地域の歴史の一端を明らかにする論考で、このような地道な研究の積み重ねにより少しずつでも地域の歴史を解明してゆければと考えております。

最後になりましたが、本書に掲載しております論考の執筆にあたりご協力いただきました皆様に厚く御礼を申しあげます。

平成31年3月31日

糸島市立伊都国歴史博物館
館長　角　　浩　行

糸島地方における弥生～古墳時代の赤色顔料
墳墓における朱の使い分けを中心に

河野　摩耶[1)]・南　　武志[1)]・岡部　裕俊[2)]
([1)] 近畿大学、[2)] 糸島市教育委員会)

1．はじめに

糸島地方は、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記された伊都国の比定地として著名である。

地内には弥生時代～古墳時代の遺跡が数多く発見調査されており、その成果は当該地域の繁栄ぶりを如実に示すものとして高く評価され、特に考古学的資料には国宝・重要文化財が含まれるなど注目を集めるものも多い。

そのなかにあって遺跡から出土する赤色顔料も近年注目度を増した資料の一つである。

北部九州地方で弥生時代～古墳時代前期に使用された赤色顔料には朱（HgS）とベンガラ（Fe_2O_3）がある。とりわけ朱は古代中国思想の強い影響を受け、重要視されていたものと考えられる。

朱やベンガラが北部九州地方の墳墓で使用が確認された例は弥生時代早期にさかのぼるが、弥生時代中期後半以降になると使用頻度が増加したことが知られ、本田光子氏による総括的な考察も行なわれている。なかでも、糸島地方は弥生早期～古墳時代にかけて多くの使用事例が報告されている。そこで当該地域の弥生～古墳時代の赤色顔料の使用例を集成し、その出土傾向について、本田氏の所見を検証しながら概観した。

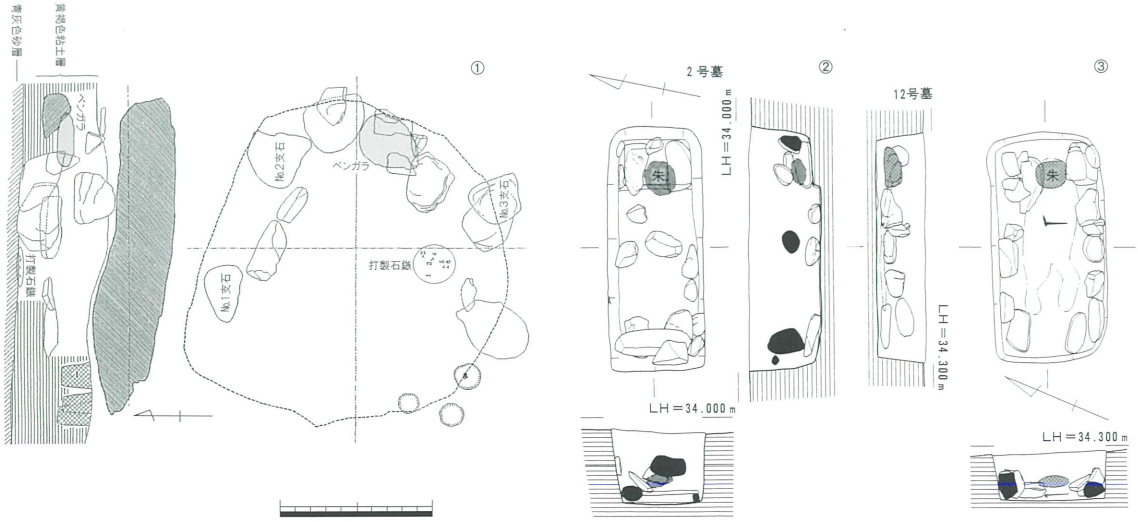
また、当該地方の長野宮ノ前遺跡、井原上学遺跡、平原１号墓から出土した朱に含まれる硫黄の同位体比分析結果を試みた。特に平原１号墓の刳抜式木棺の棺内に塗布されていた朱と棺外の朱では産出地が異なる可能性が出てきたことから。新知見として報告するものである。

なお、２．は岡部が、３．～６．は南と河野が共同で執筆した。

2．糸島の赤色顔料出土遺跡

(1) 弥生時代早期

前述のとおり、糸島地方では、弥生時代早期～古墳時代にかけての多くの墳墓や祭祀遺構などから赤色顔料の使用、出土が報告されてきた。そこで、集成を試みたところその数は76遺跡、136遺構に及びその内訳は第１表に示したとおりとなった。



第１図　志登支石墓群６号支石墓、長野宮ノ前遺跡２号墓、12号墓の赤色顔料検出状況（1/50　各報告書挿図を一部改変）

第２図　糸島地方の弥生～古墳時代の古地形と赤色顔料使用遺跡の分布（1/75,000　番号は表１、２の遺跡番号に対応）

第１表　糸島地方の赤色顔料出土遺跡一覧①

番号	遺跡名	遺構名	時期	顔料の種別		硫黄同位体比分析	備　　考
				朱	ベンガラ		
1	長野宮ノ前	２号墓	早期	●	○		朱は微量
		３号墓	早期	●	○		
		７号墓	早期		○		
		８号墓	早期	●	○		朱は微量
		12 号墓	早期		○		巻頭図版１－②
		13 号墓	早期		○		
		15 号墓	早期		○		
		22 号墓	早期		○		
		26 号墓	早期		○		
2	新町支石墓群	19 号墓	早期	●			２体の人骨のうち熟年男性の頸部に施朱
		24 号墓	早期	●			熟年男性頭部に施朱か　微量　巻頭図版１－①
3	志登支石墓群	６号支石墓	早前期		○？		赤色顔料塊　頭部に塗布か？
4	三雲柿木 11	２号甕棺墓	中期初頭				上甕の底面内部に赤色顔料様の付着物
		３号甕棺墓	中期初頭				棺内に赤色顔料
5	井原塚廻	１号甕棺墓	中期後半		○		周溝からベンガラ付着のＬ字形石杵片が出土
6	森園遺跡	１号木棺墓	中期後半	●	○		床面にベンガラと朱　朱は頭位に集中か？
7	上鑵子（６次）	土壙墓	中期～後期	未	未		土壙墓脇の小柱穴状遺構から出土
8	三雲南小路	１号甕棺墓	中期末	●			棺内に散布？　巻頭図版１－③
		１号甕棺墓	中期末	●？			甕棺上の墓壙埋土に小壺に収納し埋納
		２号甕棺墓	中期末	●			棺内塗布　巻頭図版１－④
		周溝土器	後期前半	●			複数個体の朱付着土器
9	井原ヤリミゾ	１号木棺墓	後期中葉	●			巻頭図版１－⑥
		２号木棺墓	後期	未	○		
		５号木棺墓	後期後半	未	未		
		６号木棺墓	後期中葉	●		+14.68	
		７号木棺墓	後期中葉	未	未		
		10 号木棺墓	後期	●		+1.51	
		15 号木棺墓	後期	未	未		棺内頭部　肢部散布
		17 号木棺墓	後期中～後葉	未	未		棺内散布？
		18 号木棺墓	後期	未	未		棺内（肢部？）散布
		16 号甕棺墓	後期前半	未	未		頭～胸部散布
		21 号甕棺墓	後期後半	未	未		
		36 号甕棺墓	後期前半	未	未		棺内副葬
		２号祭祀土壙	後期後半		○		巻頭図版１－⑧
		６号祭祀土壙	終末	●		+9.43	
10	三雲仲田Ｉ－16	箱式石棺墓	後期		○？		石棺側壁に塗
11	番所	S39 出土Ａ棺	後期前半	未	未		
12	井原鑓溝	甕棺墓	後期前～中葉	●？			棺内から水路に朱が流れ出した
13	三坂七尾	土壙墓	後期前半		○		棺内散布
14	浦志井尻	甕棺墓	後期前半	●			棺内副葬１塊
15	泊熊野甕棺墓	甕棺墓	後期前半	●		+14.50	（糸島高校蔵）　巻頭図版１－⑤
16	飯氏遺跡	27 号甕棺墓	後期前半	●？			棺内に一塊副葬
17	吉井水付	土器溜り	後期中葉		○		Ｌ字形石杵
18	三雲寺口	１号箱式石棺	後期後半	●？	○？		赤色顔料　鉄剣片　刀子片
		２号箱式石棺	後期後半	●？	○？		南頭位　赤色顔料　棺内壁に赤色顔料塗布　内行花文鏡　碧玉管玉　鉄鏃
		４号石棺	後期後半	●？	○？		少量の赤色顔料と鉄ヤリガンナ
		１号石棺墓祭祀遺構	後期後半	●？	○？		台付椀の内外面に赤色顔料塗布
		２号石棺墓祭祀遺構	後期後半	●？	○？		無頸壺　高坏に赤色顔料塗布
19	神在	５号甕棺墓	後期後半		○		棺内に厚く塗布（糸島高校蔵）　巻頭図版２－⑨
20	三雲番上Ⅱ－６	辰砂		●			重さ 1.4 ｇ
21	三雲仲田	辰砂		●			重さ 3.35 ｇ
22	三雲下西 534 番地	辰砂		●			重さ 0.3 ｇ
23	三雲屋敷	15 号住居跡	終末		○		住居床面中央に薄く散布
24	東二塚甕棺墓	甕棺墓	終末	●			棺底に溜り　巻頭図版１－⑦
25	長石甕棺墓	甕棺墓	終末		○		棺内にベンガラ塗布
26	平原１号墓	１号墓（棺内）	終末	●			
		１号墓（棺外）	終末	●			
		周溝	終末		○？		周溝内鉄器集中区
		３号墓	古墳前期		○		周溝内で土器、鉄器等とともに出土
		４－２号墓	古墳前期		○		
27	志登松本	木棺墓	終末	●	○		頭部に散布？
28	井原上学	１号甕棺墓	終末		○		棺内副葬
		１号石棺墓	古墳前期	●	○		
		５号石棺墓	終末	●	○		
		７号石棺墓	終末	未	未		棺外供献
		８号石棺墓	終末		○		
		９号石棺墓	終末		○		
		１号木棺墓	終末	未	未		
		３号祭祀土壙	終末	未	未		甕の外表と割れ口に赤色顔料が付着
		４号祭祀土壙	古墳初頭	未	未		土器の内外面に付着
		７号祭祀土壙	終末	●	○		長頸壺の外面、鉢の内外面に付着
		９号祭祀土壙	終末		○		土坑内に一塊に集積。長頸壺に付着
29	伝東村出土壺	甕棺墓（小児）	後期	●		+16.56	小児用甕棺底に一塊を副葬（糸島高校蔵）
30	出土地不詳	甕棺（小児）	後期	●		+11.65	棺内副葬（糸島高校蔵）

第２表　糸島地方の赤色顔料出土遺跡一覧②

番号	遺跡名	遺構名	時期	顔料の種別		硫黄同位体比分析	備　　考
				朱	ベンガラ		
31	三雲石橋Ⅱ－11･12	２号箱式石棺墓	終末～古墳		○		床西寄りにベンガラ
		３号箱式石棺墓	古墳		○		内壁と床に赤色顔料
32	三雲石橋Ⅱ－11･12	５号箱式石棺墓	古墳		○？		南頭位　硬玉勾玉　碧玉管玉　ガラス小玉　南木口側に集中して赤色顔料　墓壙底西側にも赤色顔料散布
		６号箱式石棺	古墳		○？		墓壙底面に赤色顔料を散布
		７号箱式石棺	古墳		○？		南頭位　南側床に赤色顔料（朱か？）
		祭祀土壙	古墳		○？		出土甕の底部に少量の赤色顔料
		円礫	古墳？		○？		赤色顔料付着、長卵形、長 17.1㎝　幅 10㎝、厚 9㎝、重さ 2,208 g
33	三雲サキゾノ１－１	１号住居跡	古墳初頭		○？		東側ベッドの小柱穴周辺に赤色顔料　祭祀的住居
34	三雲イフ７	２号箱式石棺	古墳		○？		小児用　棺側壁下部や床面に内に赤色顔料
		３号箱式石棺	古墳初頭		○？		西頭位　西床石に赤色顔料
		６号箱式石棺	古墳		○？		棺内敷石南寄りに赤色顔料多め　南頭位
35	三雲八龍Ⅰ-18	石棺墓	古墳前期		○？		蓋石を含む棺内壁全面及び床面
		２号土壙墓	古墳前期		○？		
		１・２号土壙	古墳前期？		○？		ガラス小玉　碧玉管玉　水晶算盤玉　ガラス勾玉とともに赤色顔料が出土　箱式石棺？
36	三雲堺Ⅰ－２・３	１号石棺墓	古墳初頭		○？		床に赤色顔料散布し北側が濃い　北頭位
37	三雲上覚Ⅰ	甕棺墓	古墳初頭		○？		小児棺内赤色顔料塗布　ガラス小玉　碧玉小玉
38	潤地頭給	Ⅰ区東 SD28	弥生終末～古墳初頭	●		+11.20	玉作り工房屋外溝
		Ⅰ区東 SD15		●		+10.23	玉作り工房屋外溝
39	潤地頭給	工作用土壙	弥生終末～古墳前期	●		－ 2.01	
40	篠原（採集品）	（糸島高校蔵）	古墳前期		○		水滴状石杵の擦過面に赤色顔料がわずかに付着
41	伏龍１号墳	１号主体部	弥生終末	未	未		棺内床直上で少量の赤色顔料の散布を確認
		２号主体部	弥生終末	未	未		棺外の右側板横に赤色顔料塊を副葬
42	東五反田	甕韓墓	弥生終末		○		棺底に一塊
		箱式石棺	古墳初頭		○		棺内副葬　巻頭図版２－⑪
43	本田孝田	１号甕棺（小児）	古墳初頭		○		棺内副葬
		２号甕棺（小児）	古墳初頭		○		棺内副葬　巻頭図版２－⑩
44	三雲下西	大溝	古墳前期中葉	●		+14.08	
45	三雲下西	１号甕棺	古墳前期	●		+8.02	棺内副葬
46	三雲中川屋敷		古墳前期前葉	●		+14.33	
47	林崎古墳	箱式石棺？	古墳前期		○		棺内壁に塗布
48	稲葉１号墳	竪穴式石槨	古墳前期		○		石槨内のかく乱埋土中から出土
	稲葉２号墳	箱式石棺	古墳前期		○		墳丘の供献甕内面に顔料付着
49	高祖東谷古墳	箱式石棺	古墳前期		○		石棺内壁塗布
		刳抜式木棺	古墳前期		○		木棺内塗布
50	若八幡宮古墳	舟形木棺	古墳前期		○		
51	御道具山２号墳	箱式石棺	古墳前期		○		棺内壁に塗彩痕跡　廃土にも顔料粒残存
52	大日古墳	箱式石棺	古墳前期		○		棺内に赤色顔料
53	立石１号墳	木棺直葬	古墳前期		○		微量　主体部に散布？　棺床粘土に混和
54	石川３号墳	木棺直葬	古墳前期		○		棺床に顔料を混和した土壌を敷設
55	熊添遺跡	第１号石棺	古墳前期		○		棺内壁に塗布
		第３号石棺	古墳前期		○		棺内壁に塗布
56	正恵１号墳	箱式石棺	古墳前期		○		棺内壁に塗布か？
57	正恵４号墳	箱式石棺	古墳前期		○		棺内壁に塗布
58	山北井田１号墳	箱式石棺	古墳前期		○		棺内壁に塗布　巻頭図版２－⑫
59	一貫山銚子塚古墳	竪穴式石槨	古墳前期	●		+15.68	棺内頭部中心に朱を散布
60	山ノ鼻１号墳	箱式石棺	古墳前期	●			残存棺材に赤色顔料が付着
61	千首堂古墳	箱式石棺	古墳前期		○？		副葬銅鏡に付着　正恵古墳群（単独立地）
62	泊一区箱式石棺	箱式石棺	古墳前期	●			副葬銅鏡に付着
63	篠原箱式石棺	箱式石棺	古墳前期		○		棺内に赤色顔料塗布
64	金屎古墳	箱形木棺	古墳前期	●	○		被葬者頭部に朱　銅鏡（棺内）にベンガラ
65	荒毛２号墳	箱式石棺	古墳前期後葉		○		棺内全面に塗布
66	元岡Ｅ－１号墳	箱式石棺	古墳前期後葉		○		棺内に赤色顔料？
67	井原１号墳	箱式石棺	古墳前期後葉		○		大型箱式石棺内壁に塗布
68	長須隈古墳	舟形石棺	古墳前期後葉		○		石棺内にベンガラを塗布　巻頭図版２－⑭
69	千里大久保１号墳	箱式石棺	古墳中期		○		棺内に赤色顔料を塗布　巻頭図版２－⑬
70	築山古墳	擦り石	古墳前期後葉				硬質砂岩製　石杵？
71	鋤崎古墳	横穴式石室	古墳前期後葉		○		石室壁面、死屍に塗布　巻頭図版２－⑮
72	石崎曲り田		古墳前期		○		土器内面にベンガラ付着　容器として使用か？
73	高上大塚古墳	不明	古墳前～中期		○		鹿角製刀装具（関西大学蔵）に赤色顔料が付着
74	丸隅山古墳	横穴式石室	古墳中期前葉	●	○		石室壁面、棺壁はベンガラを塗布　棺床、石枕推定石材に微量の朱を検出
75	釜塚古墳	横穴式石室	古墳中期前葉		○		石室壁面、箱式石棺材に赤色顔料を塗布
76	西堂四反田１号墳	横穴式石室	古墳中期中葉		○		第１屍床で赤色顔料を検出

初期の例としては、志登支石墓群、新町遺跡、長野宮ノ前遺跡が知られる。志登支石墓群では、6号支石墓の主体部の土壙から赤色顔料が検出された（第1図①）。分析の結果、酸化鉄（ベンガラ）であったことが報告されており、頭部に施されたものと推定されている。新町遺跡では昭和61（1986）年に行なわれた調査で、弥生早期の2基の土壙墓から微量の朱が検出されたことが報告されている。19号墓では遺体の頭部、24号墓では頭部に薄く朱が塗布されていた。

さらに、長野宮ノ前遺跡では、弥生時代早期の支石墓を含む40基の墳墓が確認された。このうち9基の木棺墓から赤色顔料が検出され、3基からは朱を検出している（第1図②、③）。出土状況からいずれも遺体の頭部付近に着色・塗布したものと推定される。上記の3遺跡は、いずれも支石墓を含む当該地域における弥生早期の墳墓群であり、赤色顔料が弥生時代初期の段階から葬送儀礼で使用されていたことが明らかとなった。

なお、新町遺跡では14基の墓から人骨が出土したが、上記の2基以外では頭部への赤色顔料の塗布は確認しておらず、他の墓の被葬者との間に何らかの差別化を図った可能性がある。

その原因を検討する上で、新町遺跡の24号墓被葬者の死因が興味深い。被葬者の大腿骨には柳葉形磨製石鏃が嵌入しており、これが射こまれてほどなく絶命した熟年男性であることが判明したのである。

また、長野宮ノ前遺跡では、6号墓の木棺の床面中央から打製石鏃が1個、切先が欠失した状態で出土し、さらに12号墓から2個の磨製石鏃が、いずれも切先と茎を欠失した状態で出土したことから、いずれも遺体に嵌入していた可能性がある（第1図③）。これらを含め赤色顔料が検出された墓は、東西方向に主軸を向け、切り合うことなく整然と並んでおり、その配列から短時間のうちに規則的に埋葬された印象を受け、あたかも現代の戦没兵士の墓地を想起させる。

志登6号支石墓からは6個の打製石鏃が出土し、報告書では副葬品とされているが、切先や翼部の欠損が目立ち、副葬品とするには躊躇され、遺体の体内に打ち込まれた可能性もある。

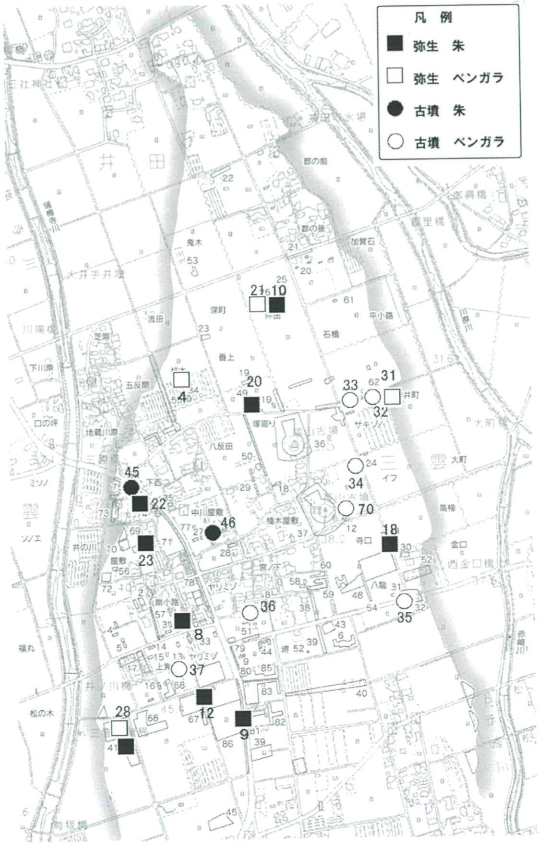
なお、6号支石墓では、ベンガラと打製石鏃の出土レベルに20㎝ほどの差が認められる。報告書では囲み石の配列の乱れも指摘されており、後世の攪乱によると報告されている。打製石鏃の評価には、より慎重でありたい。

ちなみに、6号支石墓の上石は、同群中で平面積、重量ともに大型の部類に属し、墓群の中で最も高所に営まれた、他と趣を異にする支石墓であることを付記しておく。

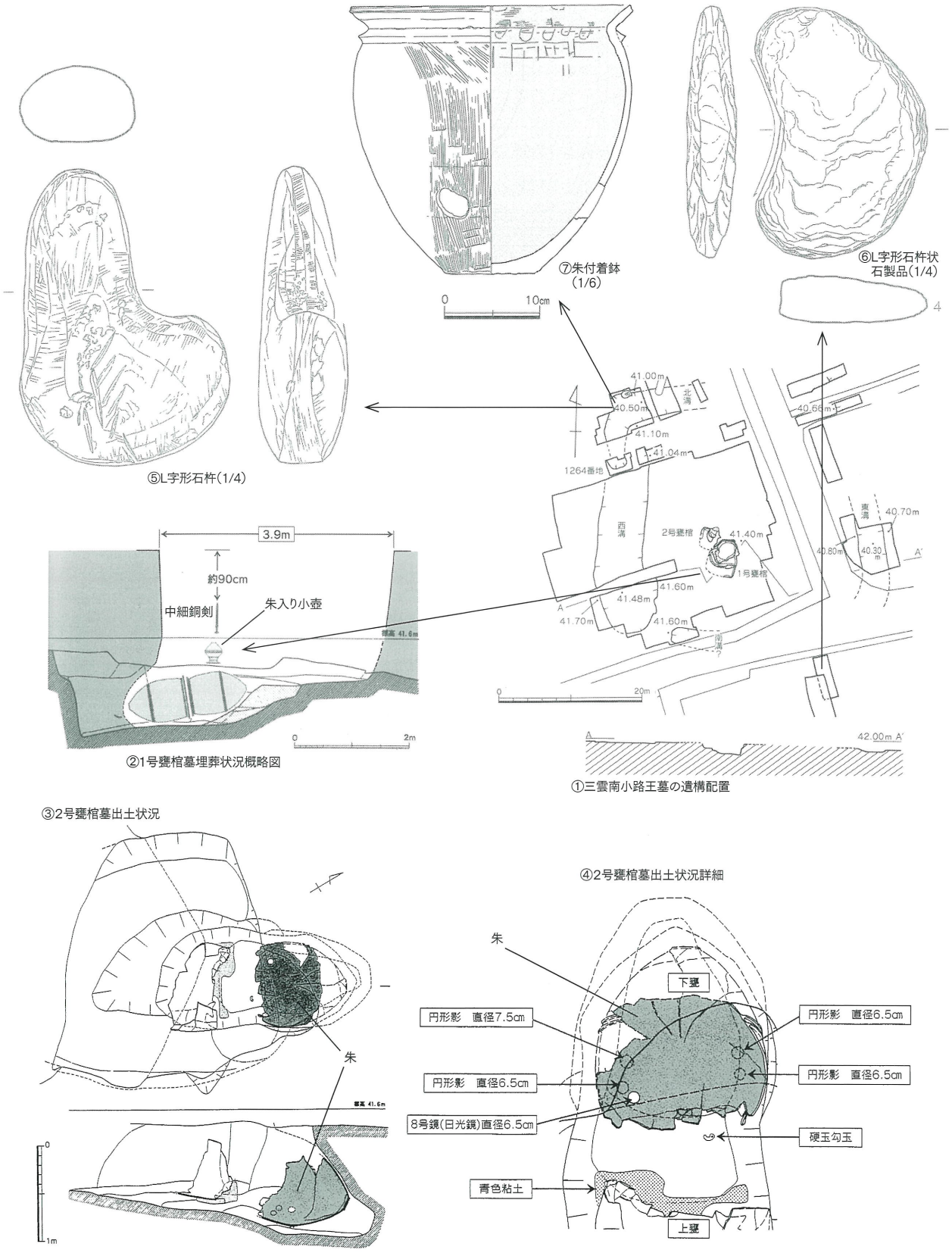
（2）弥生前期～中期中葉

当該地方では、弥生時代前期～中期中葉の墳墓から赤色顔料が使用され例は報告されていない。福岡平野などに比べると当該時期の墓の調査数は少ないのも一因かもしれないが、総数300基近い甕棺が発掘された潤地頭給遺跡や、篠原新建遺跡、また、青銅器を副葬していた久米遺跡や木船三本松遺跡においても赤色顔料の検出例は報告されていないので、基本的には赤色顔料の使用は稀であったものと推定される。

一方、福岡平野や佐賀平野などでは、当該期の首長墓において朱の使用が確認されており、



第3図　三雲・井原遺跡における赤色顔料検出遺構分布状況（1/16,000）



第４図　三雲南小路王墓における朱と関連遺物の出土状況

その使用の可否についての判断は、今後の当該期における首長墓の調査例の増加を待つ必要があるだろう。

(3) 弥生中期後半～末の赤色顔料

弥生時代中期後半（紀元前１世紀）になると、九州北部各地に「国」が成立したことが『漢書』「倭伝」に記されており、百余国の楽浪郡への通交が記されている。「国」の出現を象徴するのが特定個人墓（王墓）の出現で、これとともに墳墓における朱の使用例が増加することが知られる。糸島地方では三雲南小路遺跡がこの初源期の墳墓といえる。

この遺跡は文政５（1822）年に発見され、棺上から朱入りの小壺（第４図②）棺中から朱とともに面径27㎝の重圏彩画鏡１面を含む総数35面の前漢鏡、中細銅戈、中細銅矛、有柄銅剣、ガラス玉、ガラス璧が出土した。また、1975（昭和50年）の発掘調査で隣接して埋葬されていた２号甕棺が発見され、22面以上の小型の異体字銘帯鏡やガラス勾玉、管玉やガラス璧を加工した垂飾などが出土している。２基の甕棺に副葬された銅鏡の総数は57面以上に上り、弥生時代の単一墳墓から出土した銅鏡数としてはわが国最多数を誇る。

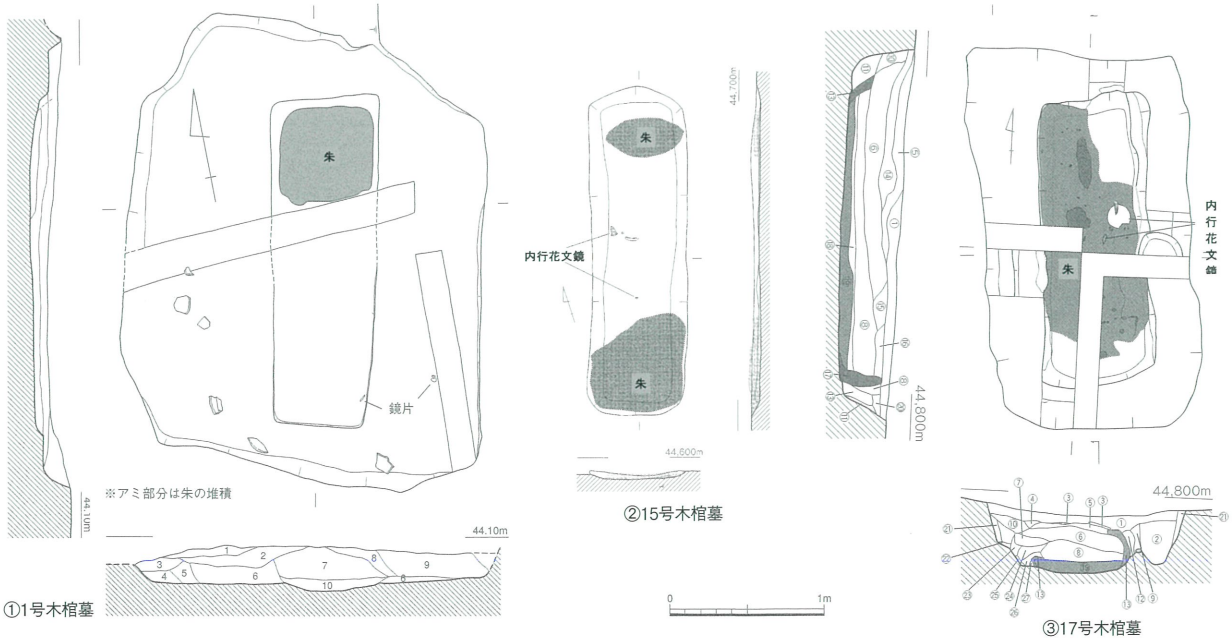
２基の甕棺の両方から棺内に朱が塗布されたことが確認できる（第４図③、④）が、特に１号甕棺では、内壁に厚く付着し（巻頭図版）、副葬品にも付着していることから、棺内（遺体）に相当量を敷いたかあるいは撒いたものと考えられる。

さらに、2000（平成12）年には墳丘をめぐる周溝から朱が付着した弥生後期前半の甕や鉢（第４図⑦）などが出土し、付近からＬ字形石杵（第４図⑤）とその形代と考えられる石製品（第４図⑥）が各１点出土した。Ｌ字形石杵は滑石製で整形痕の他には顔料を精製した痕跡は認められなかったので、これらは祭祀用の仮器であったと考えられている。このような状況から埋葬後に墳丘周囲で行われた祭祀において朱が用いられた可能性が高いことが明らかとなった。

なお、三雲南小路王墓に先駆けて赤色顔料が用いられた例として、井原塚廻遺跡が新たに確認された。１号甕棺墓の周溝からベンガラが付着したＬ字形石杵が出土しており、こちらも墓の周囲で行われた葬送儀礼あるいは埋葬後の墓前の祭祀において赤色顔料が使用されたことをうかがわせる。

(4) 弥生後期の赤色顔料

弥生後期前半と推定されている井原鑓溝遺跡の甕棺墓は、天明（1780～1788）年間の出土で、棺内から22面の銅鏡とともに巴形銅器、鉄刀、鎧板のようなものなどが出土した。発見時には甕棺内に流入した水によって朱が流れ出たとされ、相当量の朱が棺内に充填されていたと考えられる。



第５図　井原ヤリミゾ遺跡の朱検出状況例（1/50）

泊熊野甕棺墓は、２個の大型広口壺の口頸部を打ち欠いて合わせた弥生後期前半の甕棺で、上下とも棺内は朱が塗布されるとともに下棺の棺底には容量が10㍑におよぶ朱が溜まっていた（第６図①）。棺床を整えるというよりも副葬品的な性格を有していたと推定する。甕棺が小型ではあるため被葬者の階層的な位置付けは難しいが、近隣の飯氏遺跡27号甕棺墓でも、同タイプの甕棺墓から朱とともに「長宜子孫」銘内行花文鏡の副葬が確認されており、首長墓ないしは有力層墓に位置づけられると考えられる。甕棺の底に朱が納められた例は井原ヤリミゾ16号、21号甕棺でも確認されている。

一方、弥生後期前半～後半まで長期にわたり墓が営まれた井原ヤリミゾ遺跡では、13基の木棺墓の内外から朱が検出された。棺床に撒かれたもの（17号木棺墓　第５図③）もあるが、頭部を中心に遺体にふり撒かれたような状態で検出した例が多く、１号木棺墓（第５図①）では、あたかも方形の布を頭位にかぶせたかのような検出状況で、15号木棺墓では、頭部と脚部に撒かれていた（第５図②）。同遺跡では大量のガラス小玉が遺体や棺に撒かれたような状態で出土しており、両方が遺体に撒かれた可能性が高く、この時期に盛行した特徴的な葬送儀礼である。

（4）弥生終末の赤色顔料

東二塚甕棺墓は、長野川中流平野を見下ろす丘陵上に営まれた弥生終末期の甕棺墓である。

合口式の大型甕棺墓で、泊熊野甕棺墓と同様に棺底に朱が溜まった状態で出土したとされ、現在東京国立博物館に収蔵されている甕棺（下棺）ではその痕跡を見ることができ、その量の豊富さは副葬されていた鉛ガラス製のガラス釧や管玉、小玉などに朱が付着していた状況からもうかがい知ることができる。長野川流域を治めた首長墓のひとつと考えられる。

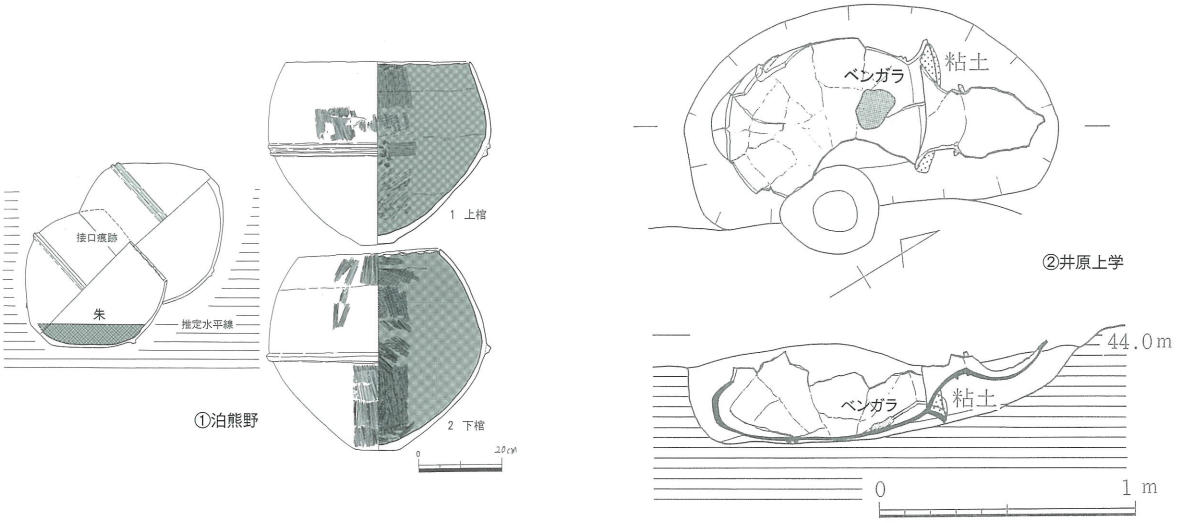
同様に棺内に赤色顔料を塗布した甕棺として神在遺跡５号甕棺墓があり、棺内に赤色顔料を厚く塗布しているのが観察できるが、こちらはベンガラを用いていた。棺山からの副葬品の出土は報告されていないことから、使用顔料の材質の違いは被葬者の階層差の反映とみることもできる（巻頭図版２－⑨）。

また、東五反田遺跡や井原上学遺跡の１号甕甕棺（第６図②）では、棺底から一塊のベンガラが出土しているが、これらは、袋などの有機素材の袋などに収めて棺内に副葬されたものかもしれない。この様相は、古墳初頭の本田孝田遺跡１、２号甕棺墓にも継承されている。

平原遺跡は弥生時代後期～古墳時代の墳墓群で、１号墓（弥生終末）と３号墓（古墳前期）、４－２号土壙墓から赤色顔料が検出されている。

１号墓では、主体部と周溝から赤色顔料が検出されている。周溝出土顔料については詳細が不明であるが現地所見では「朱」と記されている。

主体部で検出した顔料の検出位置は、Ａ－刳抜形木棺内、Ｂ－棺外に副葬された破砕銅鏡群からであり、Ａはその出土状況から、ａ－棺内塗布、



第６図　弥生後期以後の甕棺墓の赤色顔料出土例（1/30）

ｂ－棺西側（頭部付近）への散布、ｃ－棺上副葬されたガラス小玉周辺に散布され棺の腐朽に伴う棺内落下に細別できる。

Ｂは、銅鏡によって赤色顔料の付着状況が異なっており、とくに12号鏡鏡面では、朱が鏡面にあたかも刷り込まれた状況で付着し、研磨材として使用されたと報告されている。どのような状況で付着したものか、綿密な検証が必要だろう。

木棺内出土の赤色顔料は分析が行われ、いずれも朱であることが確認された（文献㉖）が、本稿で改めて分析を行ったので、次章においてその成果を報告する。

３号墓では、北西側と南側の周溝内から赤色顔料が出土している。分析は行われていないが、現地所見で「酸化鉄」と記されている。土器、鉄鏃、玉等に近接して出土していることから、これらを用いた祭祀で使用されたものと推測される。

赤色顔料の精製に関連する遺跡としては、潤地頭給遺跡が注目される。弥生終末～古墳前期の玉つくり工房を囲む溝中からベンガラ、朱が小塊となって出土している。これら顔料とともに石杵などの精製用具も出土していることから、遺跡内において、朱やベンガラの精製が行われた可能性が高いと考えられる。朱の産出地については、硫黄同位体比による分析の結果から中国産であることが判明しており、舶載の辰砂を当該集落で精製していたことになるが、詳細についての検討は本報告の刊行を待ちたい。

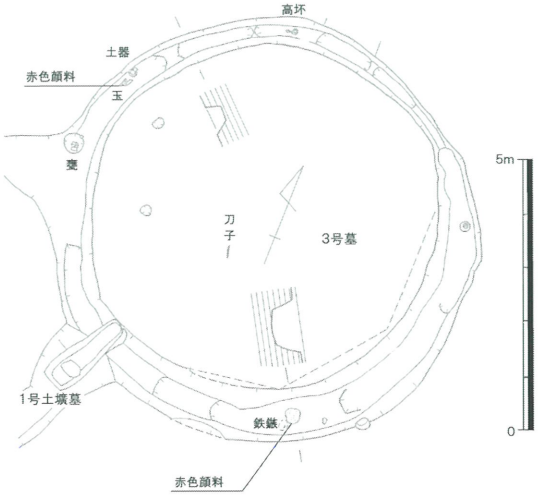
三雲・井原遺跡では辰砂粒が３地点で出土しており、舶載された辰砂の一部は加工されずに王都にもたらされたのであろう。

（5）古墳時代の赤色顔料

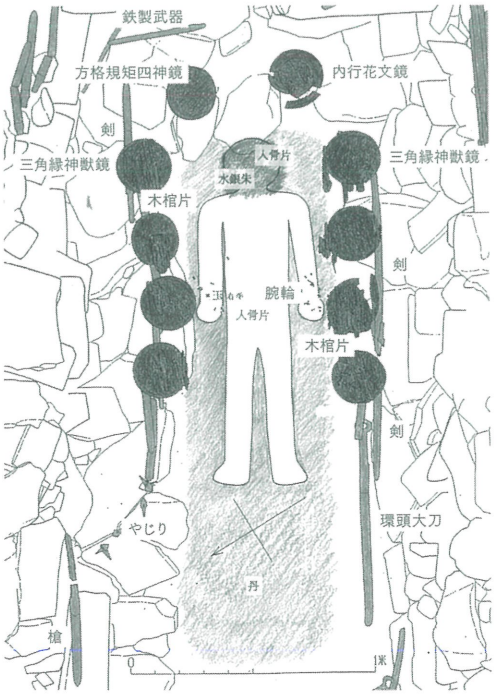
古墳時代を迎えると、墳墓に使用される赤色顔料はベンガラが主流となり、主に石棺や石室（石槨）内部の塗色に用いられた。主体部となる箱式石棺の周壁や床などが赤く塗られた例が数多く確認されている。

古墳時代の朱を使用した例としては、一貴山銚子塚古墳が有名である。昭和25（1950）年に小林行雄らによる発掘調査が行われたが、竪穴式石槨内に収められた木棺内部にベンガラが塗られており、頭部に朱が撒かれていたことが報告されている。使用イメージは第８図のような状況が想定される。

この他、山の鼻１号墳、金屎古墳、丸隅山古墳でも朱の使用が報告されており、規模に大小の差があるものの、前方後円墳においてのみ朱が検出されていることは興味深い。なお、丸隈山古墳では、石室の周壁および石棺に塗られた顔料はベンガラであるが、石棺床面と枕石からはベンガラに微量の朱が含まれていたという。頭部に朱を施す儀礼が古墳時代中期前半まで継続されていたことがわかる。



第７図　平原３号墓における赤色顔料出土地点（1／150　報告書挿図を一部改変）



第８図　一貴山銚子塚古墳における赤色顔料検出状況略図（報告書挿図を一部改変）

3．長野宮ノ前遺跡出土朱の分析

(1) 遺跡の概況と朱の出土状況

長野宮ノ前遺跡からの赤色顔料の分析結果については、当該遺跡の発掘調査報告書の中で報告しているが、その後、硫黄同位体比分析による産地同定法が確立し、改めて分析が行われた。

遺跡は、長野川中流左岸の標高 40 mほどの沖積段丘上に営まれた弥生早期の墳墓群である。

東西 15 m、南北 20 mの範囲に支石墓、甕棺墓、木棺墓、土壙墓などが密に分布するが、支石墓は墓群の北西端に集中し、付近に残る上石数から、少なくとも５基は存在したものと推定している。

朱を検出したのは、木棺墓群に集中する。東西方向に主軸を向けて一定の間隔をとりながら西・中・東の概ね３列に並んでおり、多くの墳墓は墓壙の隅角に標石を立てているのが特徴で、これらのうち９基から赤色顔料が検出されている（第９図）。

12 号墓では、埋土下層から人形状の黒変土壌が認められ、頭部と思しき地点から赤色顔料が集中して検出された。報告書では触れそびれたが、赤色顔料下から歯片が出土したことから顔面を中心に塗布されたものと推定している（第１図②）。

(2) 分析試料

長野宮ノ前遺跡の硫黄同位体分析用の朱のサンプルは、糸島市教育委員会から提供された朱（HgS）２点である。そのうち長野宮ノ前遺跡８号墓の朱のサンプルが硫黄同位体分析での採取・分析が可能な量であった。

本田光子氏の分析によれば、朱とともにベンガラが検出されており、朱とベンガラ双方が用いられていたと報告している。

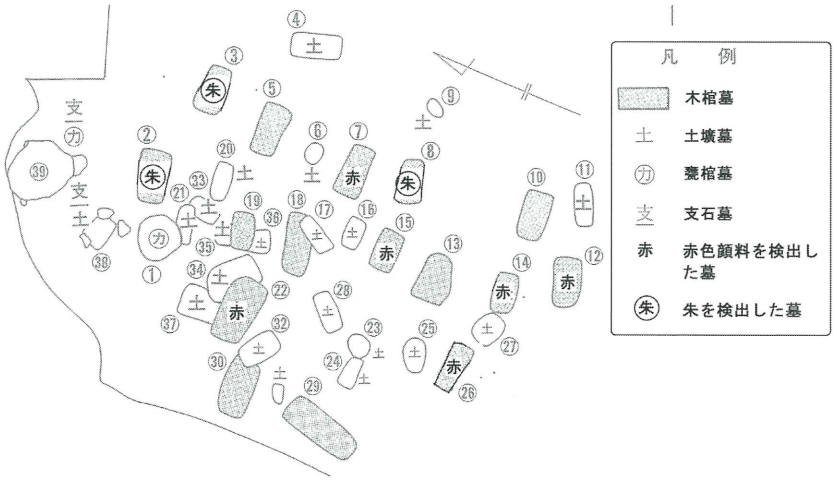
報告書による分析結果から、本遺跡において朱が検出されている事例が２遺構にとどまっていること、硫黄同位体分析のデータが１点しか得られないことなどから判断すると、全体的に朱の量は微量であった可能性がある。

しかし、サンプリング方法と試料の状況によっては、朱の分析は朱１粒でも分析が可能である。特殊な粘着テープを必要な箇所に貼り付けて朱を微量採取し、超微量硫黄同位体分析に供した。

(3) 分析方法

朱は硫化水銀（HgS）であり、水銀（Hg）と硫黄（S）の化合物である。硫黄には、安定同位元素として ^{32}S, ^{33}S, ^{34}S, ^{36}S の４つがあり、その存在割合は 95.02%、0.75%、4.21%、0.02%である。その中で、硫黄同位体分析は ^{32}S と ^{34}S の割合を調べ、比較検討する方法であり、地球化学の分野では普遍的な研究手法である。我々は、超微量硫黄同位体分析法を開発し（Takahashi et al.）、朱の硫黄同位体分析にこの手法を応用した。すなわち、朱を直接元素分析計に導入し、生じた亜硫酸ガスを液体窒素下で固定した後にヘリウムガスで質量分析計に導入する。本法の開発でおよそ１粒の朱で分析が可能となり、従来法に比べおよそ 1000 倍の感度の上昇が得られた。

日本列島のような火山地帯の朱（辰砂鉱石）は質量数が 32 の軽い硫黄を多く含むが、中国ではじっくりと熟成されて生成されるため質量数 34 の重い硫黄を多く含む傾向がある。この性質を朱の硫黄同位体分析に適用した。硫黄同位体比は、朱に含まれる ^{32}S と ^{34}S の同位体比を、標準物質（キャニオン・ディアブロ隕石中のトロイライト（FeS）のもつ同位体比）との千分偏差、$\delta^{34}S$ (‰) で表示する。この標準物質よりも ^{34}S（重い硫黄）



第９図　長野宮ノ前遺跡の墳墓の配置と赤色顔料の出土状況
（文献１　第 40 図に加筆）

に富むものはδ値がプラス、^{32}S（軽い硫黄）に富むものはδ値がマイナスになる（今津ほか2005）。中国の辰砂鉱石は^{34}Sに富み、標準物質に比べプラスのδ値を示すケースが多い。一方、日本の辰砂鉱石は^{32}Sに富む辰砂を生成しやすく、マイナスのδ値を示すケースが多い。

（4）分析結果

硫黄同位体分析の結果、長野宮ノ前遺跡8号墓では、硫黄同位体分析の値が＋12.1‰を示した。硫黄同位体の値がプラスの傾向を示すのは中国産の朱である可能性が高いことから、中国産朱であることが考えられる。北部九州では、弥生の墳墓で朱が施されるのは弥生時代早期以降であり、長野宮ノ前遺跡の朱は、その中でも初期段階に位置づけられる。硫黄同位体比がプラスの値の中国産朱であるということは、他地域における古段階である弥生時代中期初頭（金海式）以降の早良平野や福岡平野、佐賀平野などで検出される朱の硫黄同位体比の値とも傾向が異なっており、興味深い結果となっている。

また、時期や遺構の種類は異なるが、糸島地方に所在する弥生時代後期の浦志井尻遺跡や、井原ヤリミゾ遺跡、弥生時代終末～古墳時代初頭の潤地頭給遺跡でも硫黄同位体比が近似した値の朱が検出されている。弥生時代中期に関してはサンプルがないため、現時点では断言ができないが、糸島地方においては、大陸産の朱が断続的にもたらされていたのではないかと考えられる。

4．井原上学遺跡出土の朱の分析

（1）遺跡の概況と朱の出土状況

井原上学遺跡は、伊都国の拠点集落である三雲・井原遺跡の南西端、標高42ｍほどの瑞梅寺川の段丘斜面に営まれた墳墓群で、他に弥生時代～古墳時代にかけての竪穴住居、溝、土坑なども発見されている。

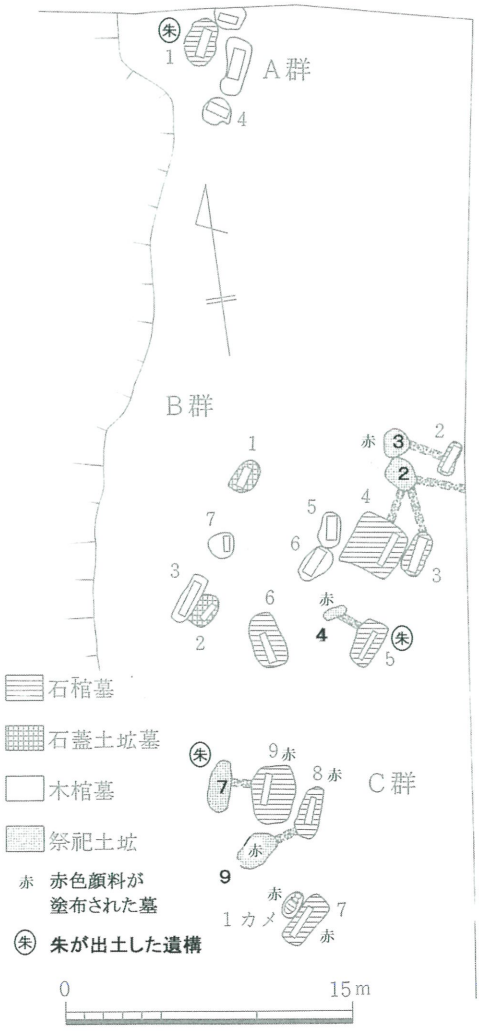
赤色顔料を検出したのは、弥生終末～古墳初頭の箱式石棺墓、木棺墓、石蓋土壙甕棺墓によって構成される墳墓群とこれらに伴う祭祀土壙からである（第10図）。

1、5、6、8、9号石棺墓では、棺床あるいは側壁に塗布されていた顔料から採取したサンプルから分析、また、7号、9号祭祀土壙内では、埋土中から出土した赤色顔料塊から分析している。

また、1、2、3、4号祭祀土壙では、明確な赤色顔料塊は検出できなかったが、出土した土器の表面に丹塗り痕跡とは明らかに異なる濃い赤色顔料の付着が確認されている。これらは1984年の調査直後は、サンプル量が少なかったことから詳細についての分析は行っていないが、近年、分析精度が上がり、微量でも分析が可能となったことから、今後その材質について分析を行いたい。

（2）分析試料

井原上学遺跡の硫黄同位体分析用の朱のサンプルは、糸島市教育委員会から提供された朱（HgS）7点である。本田光子氏の分析によれば、朱が検出されたのは、1号石棺墓棺（第11図①）内・



第10図　井原上学遺跡の墳墓と祭祀遺構の配置
（文献26　第36図に加筆）

側石と５号石棺墓（第 11 図②）棺床・側石、７号祭祀土壙埋土の３試料だけである。今回、硫黄同位体分析にあたり採取・分析が可能であったのは、井原上学遺跡１号石棺、墓棺内側石の試料１点のみにとどまった。

サンプリング方法ならびに分析方法については、上記の長野宮ノ前遺跡と同様の超微量硫黄同位体分析法を採用した。

(3) 分析結果

硫黄同位体分析の結果、井原上学井原上学遺跡１号石棺（第 11 図①）では、硫黄同位体分析の値が＋ 19.8‰を示した。硫黄同位体の値がプラスの傾向を示すことから、中国産朱である可能性が高い。本田光子氏は、井原上学遺跡においても、長野宮ノ前遺跡同様に、朱とベンガラ双方が検出されていると述べている。また、石棺墓の棺内（床面を含む）にベンガラを、遺骸の一部に朱を施したのではないかとも指摘している。サンプル量が微量であったため、硫黄同位体分析はできなかったが、７号祭祀土壙埋土においても朱とともにベンガラが検出されていることが報告書では記載されており、使用方法は明らかではないものの、朱とベンガラが同時に用いられていたことが推測される。朱が出土した石棺について、１号石棺では漆椀が出土し、５号石棺（第 11 図②）では棺床に板石を敷き詰めているなど、他の石棺と比べると副葬品を有したり内部の造作に手が込んでいるなど、集団内で高位に位置づけられていたものとみられ、朱の使用は集団内における階層の差が反映したものである可能性があるだろう。

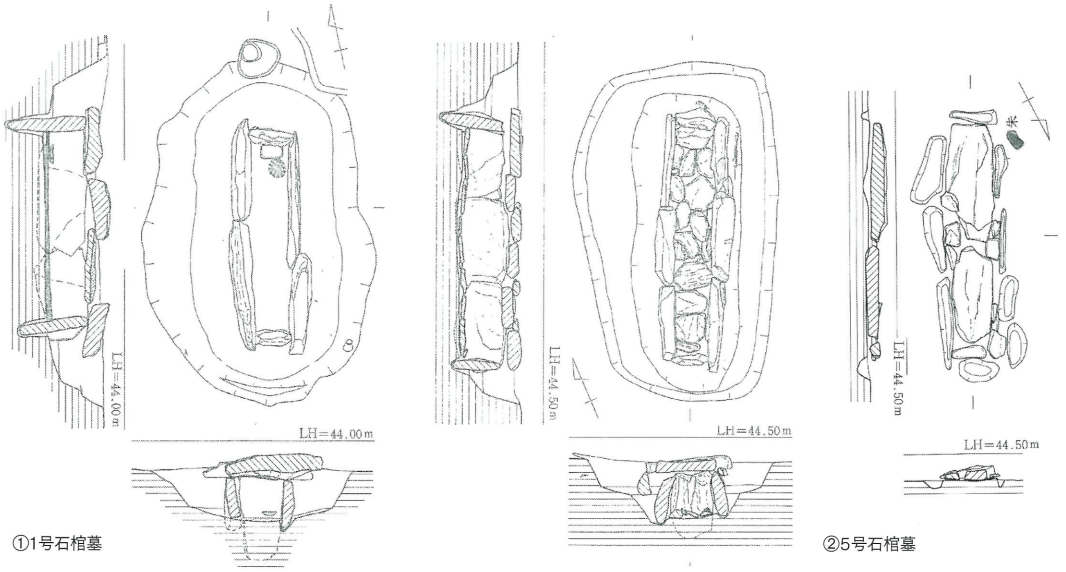
５．平原１号墓出土の朱の分析

(1) 遺跡の概況と朱の出土状況

一方、平原遺跡は弥生時代後期～古墳時代にかけて断続的に営まれた５基の墳丘墓、周辺土壙墓、祭祀遺構などにより構成されている。弥生時代終末と推定される１号墓は、中央の大型墓壙内に東西に主軸を置いた刳抜式木棺が納められ、その内外から豊富な副葬品が出土したことなどから、歴代伊都国王墓のひとつと考えられている。朱は、木棺内の棺床の広範囲から出土しており、付近から大量のガラス玉や耳璫が出土していることなどと合せて、遺体は頭位を西に向けて埋葬されていていたと考えられている。

棺内西側の玉類の出土地点周囲（第 12 図② b）から、朱が多く出土していることが特徴的で、井原ヤリミゾ遺跡で多くみられるように、頭部を中心とする上半身に朱が撒かれた可能性が高いことをうかがわせる。

このなかで、刳抜式木棺内から出土した 500 個を超えるガラス小玉（第 12 図③）について、調査時の所見から棺上に置かれていたものが木棺の腐朽に伴い棺底に落下したものと考えられている。



第 11 図　井原上学遺跡における朱を検出した石棺墓（1/50）

第３表　平原遺跡１号墓出土朱の硫黄同位体分析の結果

No.	遺跡名	所在地	遺構・注記	（δ^{34}S‰）	備考
1	平原遺跡	糸島市	木棺内土	13.47	棺内
2	平原遺跡	糸島市	棺内遺物　60-28	14.51	棺内
3	平原遺跡	糸島市	箱２　棺内遺物　60-21 シュ	13.93	棺内
4	平原遺跡	糸島市	ガラス丸玉周辺　49 号	7.08	棺外副葬玉付着
5	平原遺跡	糸島市	箱１　棺内遺物　60-32	6.89	棺内
6	平原遺跡	糸島市	１号墓割竹形　木棺　棺床内	13.94	棺内
7	平原遺跡	糸島市	箱１　弥生古墳割竹形木棺内　55-10　朱	14.36	棺内

※備考は柳田康雄氏の教示による。

刳抜式木棺の棺床には朱が塗布されていたことが確認された一方、棺外に破砕副葬された銅鏡のうち 32 面に朱が付着していることも確認されている。12 号鏡では鏡面の研磨に朱が用いられており、その使用方法についても注意が必要である。

なお、墳丘北西周溝からも赤色顔料の出土が図示されているが（第 12 図④）、その分析結果等は公表されておらず性格は不明である。

（2）分析試料

さて、平原１号墓の硫黄同位体分析用の朱のサンプルは、糸島市教育委員会から提供された朱（HgS）７点である。墳丘墓上にある刳抜式木棺の周辺で試料が採取され、保存されていた。試料は、木箱中のポリチャックに、朱だけが他の副葬品とは別に遺構毎に分類され、各々保管されていた。１点検出部位の特定が不明瞭なものが混在していたが、その他の試料については、大概の情報が判別できるような状態にあった。

サンプリング方法ならびに分析方法については、上述の長野宮ノ前遺跡、井原上学遺跡と同様の方法を採用し、分析に供した。平原１号墓では朱のサンプルの量が長野宮ノ前遺跡や井原上学遺跡と比較して、残存状況が良好であったため、全７サンプルの分析が可能な状況にあった。

（3）分析結果

第３表に、硫黄同位体分析結果を示す。No. 1 ～ No. 3、No. 6 と No. 7 は硫黄同位体分析の測定結果から考察すると同一の産地の可能性が高く、また、No. 4 および No. 5 は δ 値が異なっていることから、この２つとそれ以外は異なる産地である可能性が高い。しかしながら、今回測定した７サンプルはいずれも δ 値が大きくプラスの値を示すことから No. 1 ～ No. 7 は中国産であると推察される。また、No. 5 のポリチャックの注記からでは、サンプリングの位置が不明瞭ではあるが、No. 4 の値に極めて近く同一ポイントでの採取資料である可能性が高い。

硫黄同位体分析の結果、平原遺跡１号墓の刳抜式木棺では、用途によって朱を使い分けていた可能性がある。すなわち、朱の検出位置から、棺内に塗布されていた朱と棺外で検出された朱とでは異なった産地の中国産朱が用いられた可能性が示唆されるのである。

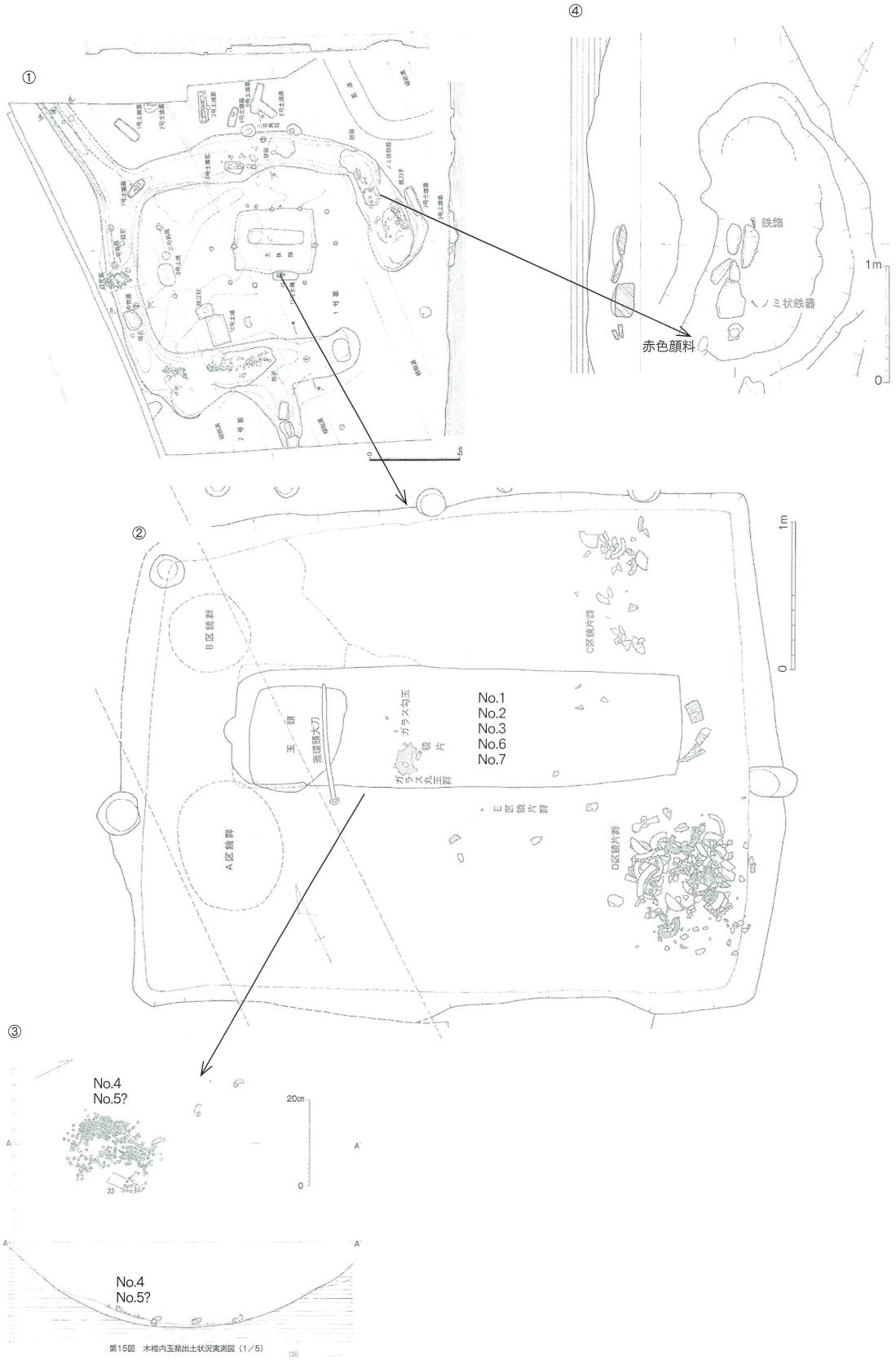
６．まとめ

伊都国はかつて「魏志倭人伝」には、「一大率」が置かれたことが記され、また、「世有王」国とも記されており、弥生時代中期から弥生時代終末期まで三雲南小路遺跡、井原鑓溝遺跡、平原遺跡と３遺跡に象徴される王墓の存在がこれを裏付けている。その中で最古の王墓と推定されているのは、三雲南小路遺跡である。

墳丘の周溝から出土した内面に朱が付着する鉢（弥生時代後期前半）の硫黄同位体比はマイナスの値の－ 7.97‰を示している。産地について現時点では特定できないが、今後マイナスの値を示す朱については、鉛同位体分析の分析結果次第では産地が特定できるだろう。

一方、奴国の王墓推定地である弥生時代中期後半の福岡県須玖岡本Ｄ地点遺跡では硫黄同位体比の値が＋ 5.31‰を示し中国産朱の可能性が高く、三雲南小路遺跡の甕棺内の朱の分析を行っていないが、少なくとも弥生時代中期末～後期前半にかけて産地の異なる朱が糸島～福岡平野において使用されていた可能性を指摘できる。

硫黄同位体分析の結果、平原遺跡１号墓の刳抜



第 12 図　平原 1 号墓における赤色顔料のサンプリング位置

式木棺では、遺構により朱を使い分けていた可能性がある。すなわち、朱の検出位置から、棺内に塗布されていた朱と棺外で検出された朱とでは異なった産地の中国産朱が用いられた可能性が示唆される。

棺内・棺外いずれも硫黄同位体比の値が大きくプラスの値を示すことから中国産であると考えられる。しかし一方、硫黄同位体比の値が棺内と棺外とでは異なることが判明した。このことから、木棺の内と外で検出された朱が棺の内外で産地の異なるものが使い分けられていた可能性が推察された。これは、葬送儀礼における段階や用途に応じて朱の意図的な使い分けがあった可能性が推察できる。

また、井原遺跡ヤリミゾ遺跡の墳墓群や泊熊野甕棺墓などの有力層の墳墓などで用いられた朱の産地が、平原遺跡１号墓棺内の朱の硫黄同位体の値が近似していることも注目に値する。つまり棺床に敷かれた朱は、伊都国内の上位層において安定的に入手可能な朱が散布された可能性が高いと考えられるのである。

しかし、１号墓の棺上に散布されたとみられる朱については、硫黄同位体の値が近い朱が、同時期の他の遺構では見出すことができないため、これらの産地、入手方法等についての詳細は今後の継続的な検討課題としたい。

最後になりましたが、関連資料の調査と報告の機会を与えていただいた福岡市博物館、春日市教育委員会、施朱の状況に関してご教示を賜った柳田康雄氏には感謝申し上げます。

なお、硫黄同位体分析は、JSPS 科研費 262416 の助成を受けたものです。ここに深謝します。

【参考文献】

今津節生・南武志　2005「綾部山 39 号墳出土朱の硫黄同位体比」『綾部山 39 号墓発掘調査報告書』89-92 頁、御津町教育委員会

江﨑靖隆編　2006『三雲・井原遺跡』前原市教育委員会

岡部裕俊編　2017『新訂版　史跡曽根遺跡群　平原遺跡』糸島市教育委員会

河野摩耶他　2014「九州北部地方における朱の獲得と利用－硫黄同位体比分析による産地推定－」『古代』132, 27-38 頁、早稲田大学考古学会

河野摩耶他　2019「九州北部における古墳出現期の“朱„について」『古代学研究』古代学研究会、査読中

平尾和久編　2013『三雲・井原遺跡ⅤⅢ－総集編－』糸島市教育委員会

本田光子　1987「井原上学遺跡出土の赤色顔料について」『井原遺跡群』前原市教育委員会

本田光子・成瀬正和　1989「長野宮ノ前遺跡出土の赤色顔料について」『長野川流域の遺跡群Ⅰ』前原町教育委員会

南　武志　2016「考古資料の産地推定法としての同位体分析の応用－倉敷市王墓山女男岩遺跡出土の朱の産地についての考察－」『倉敷市考古館研究集』22、52-55 頁、倉敷考古館

南　武志　2018「中国および朝鮮半島における古代の朱産地」『文化財科学』第 77 号、47-57 頁、日本文化財科学会

Takahashi, K. et al., High − sensitivity sulfur isotopic measurements for Antarctic ice core analyses. Rapid Communications in MassSpectrometry. https://doi.org/10.1002/ rcm.8275.

出典等一覧（遺跡一覧表番号に対応）

1　本田光子「長野宮ノ前遺跡弥生早期墳墓群出土の赤色顔料について」『長野川流域の遺跡群Ⅰ』 1989 前原町教育委員会
2　橋口達也『新町遺跡』 1987　志摩町教育委員会
3　斎藤忠　鏡山猛 『志登支石墓群』 1956　文化財保護委員会
4　柳田康雄　小池史哲 『三雲遺跡Ⅱ』1981 福岡県教育委員会
5　岡部裕俊「井原塚廻遺跡の再検討」『伊都国歴史博物館紀要 11』 2016　伊都国歴史博物館
6　志賀智史「森園遺跡１号木棺出土の赤色顔料」『森園遺跡』 2007　二丈町教育委員会
7　岡部裕俊　調査　未報告
8　柳田康雄『三雲遺跡南小路地区編』 1985　福岡県教育委員会
　本田光子「前原市三雲南小路遺跡出土赤色顔料について」『三雲・井原遺跡Ⅱ』 2002　前原市教育委員会
9　今津節生　南武志「福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比」『三雲・井原遺跡』 2006　糸島市教育委員会
10　柳田康雄　小池史哲 『三雲』遺跡Ⅱ』1981 福岡県教育委員会
11　古川秀幸 [福井冬切（ふゆきり）、番所出土の後期甕棺について『深町遺跡』 2008　二丈町教育委員会
12　青柳種信「同郡井原村所等穿出古鏡図」『柳園古器略考』 1822
13　比佐陽一郎　岡部裕俊「三坂七尾遺跡出土銅銭の再検討」『福岡考古 20』2006 福岡考古懇話会
14　今津節生　南武志「福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比」『三雲・井原遺跡』 2006　糸島市教育委員会
15　今津節生　南武志「福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比」『三雲・井原遺跡』 2006　糸島市教育委員会
16　宮井善朗『飯氏遺跡群』1992　福岡市教育委員会

17　古川秀幸『吉井水付遺跡』2008　二丈町教育委員会
18　小池史哲　『三雲遺跡Ⅳ』　1982　福岡県教育委員会
19　岡部裕俊「弥生時代のタイムカプセル」『福岡県立糸島高等学校郷土博物館公式ガイドブック』2016　糸島高校
20　柳田康雄　小池史哲『三雲遺跡Ⅱ』　1981　福岡県教育委員会
21　小池史哲『三雲遺跡Ⅲ』　1982　福岡県教育委員会
22　牟田華代子『三雲・井原遺跡Ⅴ』
23　牟田華代子『三雲・井原遺跡Ⅴ』
24　原田大六「日本最古のガラス」『糸高文林　創刊号』1951　糸島高校
25　谷口賢治「筑前長石出土の弥生式甕棺墓」『糸高文林８号』　1960　糸島高校
26　『平原弥生古墳』1992　平原遺跡発掘調査報告書編集委員会
27　平尾和久「志登松本遺跡の調査」『潤地頭給遺跡Ⅱ』2007　前原市教育委員会
28　本田光子『井原遺跡群出土の赤色顔料について」『井原遺跡群』　1987　前原町教育委員会
29　河野摩耶他「北部九州における古墳出現期における“朱”について」『古代学研究』　2019　古代学研究会、査読中
30　今津節雄　南武志「福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比」『三雲・井原遺跡』　2006　糸島市教育委員会
31　柳田康雄　小池史哲　『三雲遺跡Ⅱ』　1981 福岡県教育委員会
32　柳田康雄　小池史哲　『三雲遺跡Ⅲ』1982 福岡県教育委員会
33　小池史哲　『三雲遺跡Ⅲ』1982 福岡県教育委員会
34　小池史哲　『三雲遺跡Ⅳ』1982 福岡県教育委員会
35　小池史哲　『三雲遺跡Ⅳ』1982 福岡県教育委員会
36　小池史哲　『三雲遺跡Ⅳ』1982 福岡県教育委員会
37　小池史哲　『三雲遺跡Ⅳ』1982 福岡県教育委員会
38　江野道和　『潤地頭給遺跡の概要』2005 前原市教育委員会
今津節生　南武志「福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比」『三雲・井原遺跡』　2006　糸島市教育委員会
39　河野摩耶他「北部九州における古墳出現期における“朱”について」『古代学研究』　2019　古代学研究会査読中
40　岡部裕俊「朱赤に染められた弥生人の内なる世界」『福岡県立糸島高等学校郷土博物館公式ガイドブック』2016　糸島高校
41　川村博『伏龍遺跡』1981 前原町教育委員会
42　1983 年に前原町教育委員会調査（担当岡部　角浩行）未報告
43　岡部裕俊　比佐陽一郎「ガラス玉副葬の甕棺墓」『伊都国歴史博物館紀要３』　2008
44　柳田康雄　『三雲遺跡Ⅰ』　1980　福岡県教育委員会
45　今津節生　南武志「福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比」『三雲・井原遺跡』　2006　糸島市教育委員会
46　河野摩耶他「北部九州における古墳出現期における朱について」『古代学研究』　2019　古代学研究会、査読中
47　岡部裕俊『飯原門口遺跡』1998　前原市教育委員会
48　柳田康雄他『稲葉古墳群』　1985　志摩町教育委員会
49　川村博「高祖東谷１号墳」『井原１号墳』2004　前原市教育委員会
50　柳田康雄「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書３』1972　福岡県教育委員会
51　1983 年に前原町教育委員会調査　未報告
52　後藤守一　『漢式鏡』1926　雄山閣
53　岡部裕俊「立石１号墳」『荻浦』1995 前原市教育員会
54　岡部裕俊「石川３号墳」『荻浦』1995　前原市教育委員会
55　浜田信也『熊添遺跡』　1984　志摩町教育委員会
56　川村博『正恵古墳群』1980　前原町教育委員会
57　岡部裕俊「正恵４号墳」『井原地区周辺の古墳群』1994　前原市教育委員会
58　1996 年に前原市教育委員会調査（担当林覚）　未報告
59　小林行雄『一貴山銚子塚古墳の研究』1955　福岡県教育委員会
60　本田光子「鉄片の保存処理と付着した赤色顔料について」『山ノ鼻１号墳』1992　福岡市教育委員会
61　岡部裕俊　西川寿勝『双頭龍文鏡』『福岡考古 16 号』1995　福岡考古懇話会
62　岡部裕俊「泊一区出土の獣帯鏡について」『伊都国歴史博物館紀要第２号』　2007　伊都国歴史博物館
63　与小田寛他「篠原出土の箱式石棺調査報告」『糸高文林 15 号』1967　糸島高校
64　久住猛雄「桑原金屎古墳」『元岡・桑原遺跡群６』2006　福岡市教育委員会
65　後円部頂上にベンガラが明瞭に残る石棺材が祠に姿を変えて残る。
66　星野恵美「Ｅ－１号墳」『元岡・桑原遺跡群５』2005　福岡市教育委員会
67　岡部裕俊「井原１号墳」『井原１号墳』2006　前原市教育委員会
68　柳田康雄「長須隈古墳」『末盧国』1982　唐津湾周辺遺跡調査委員会
69　平成 28 年７月に担当者の御好意で岡部が現地実見
70　柳田康雄　小池史哲　『三雲遺跡Ⅲ』1982 福岡県教育委員会
71　杉山富雄『鋤崎古墳』2002　福岡市教育委員会
72　古川秀幸『石崎曲り田遺跡』二丈町教育委員会
73　岡部裕俊「曽根古墳群の記憶」『伊都国歴史博物館紀要第 10 号』2015　伊都国歴史博物館
74　柳沢一男『丸隅山古墳』1987　福岡市教育委員会
75　石山勲『釜塚』1982　前原町教育委員会
76　岡部裕俊「西堂四反田遺跡」『井原地区周辺の遺跡群』1994　前原市教育委員会

ヒョウタン形土器小考

平尾　和久（糸島市教育委員会）

1．はじめに

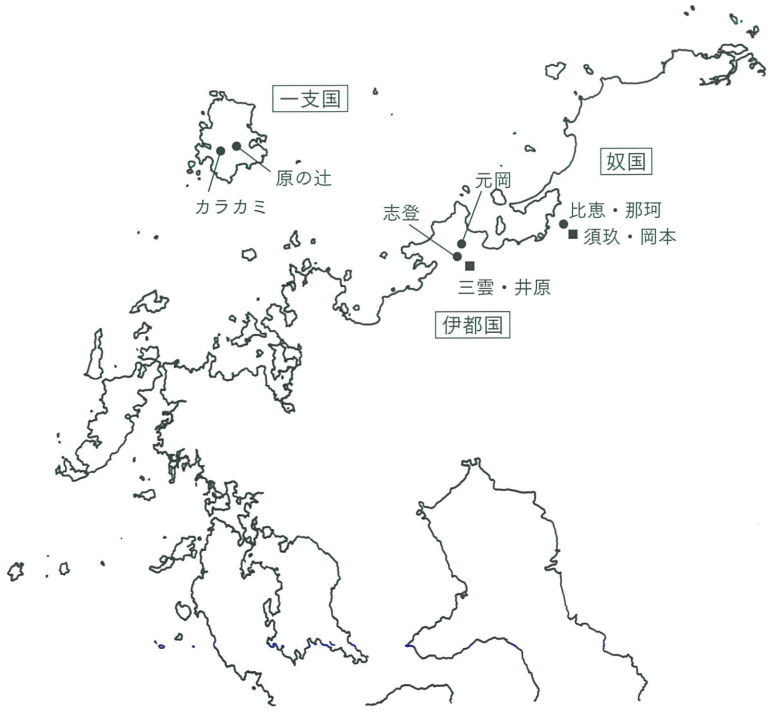
平成30年度に発掘調査を実施した志登尾北遺跡では戦国期の環濠居館や、弥生・古墳時代の住居跡が確認され、平成31年3月末日に文化財調査報告書を刊行した（秋田編2019）。そこでは、限られた遺跡でのみ出土するヒョウタン形土器が出土したものの、事実報告のみで、その意義については触れることができなかった。そこで本稿ではヒョウタンに関する説話等を検討し、ヒョウタン形土器に与えられた性格を推定したみたい。

2．研究略史

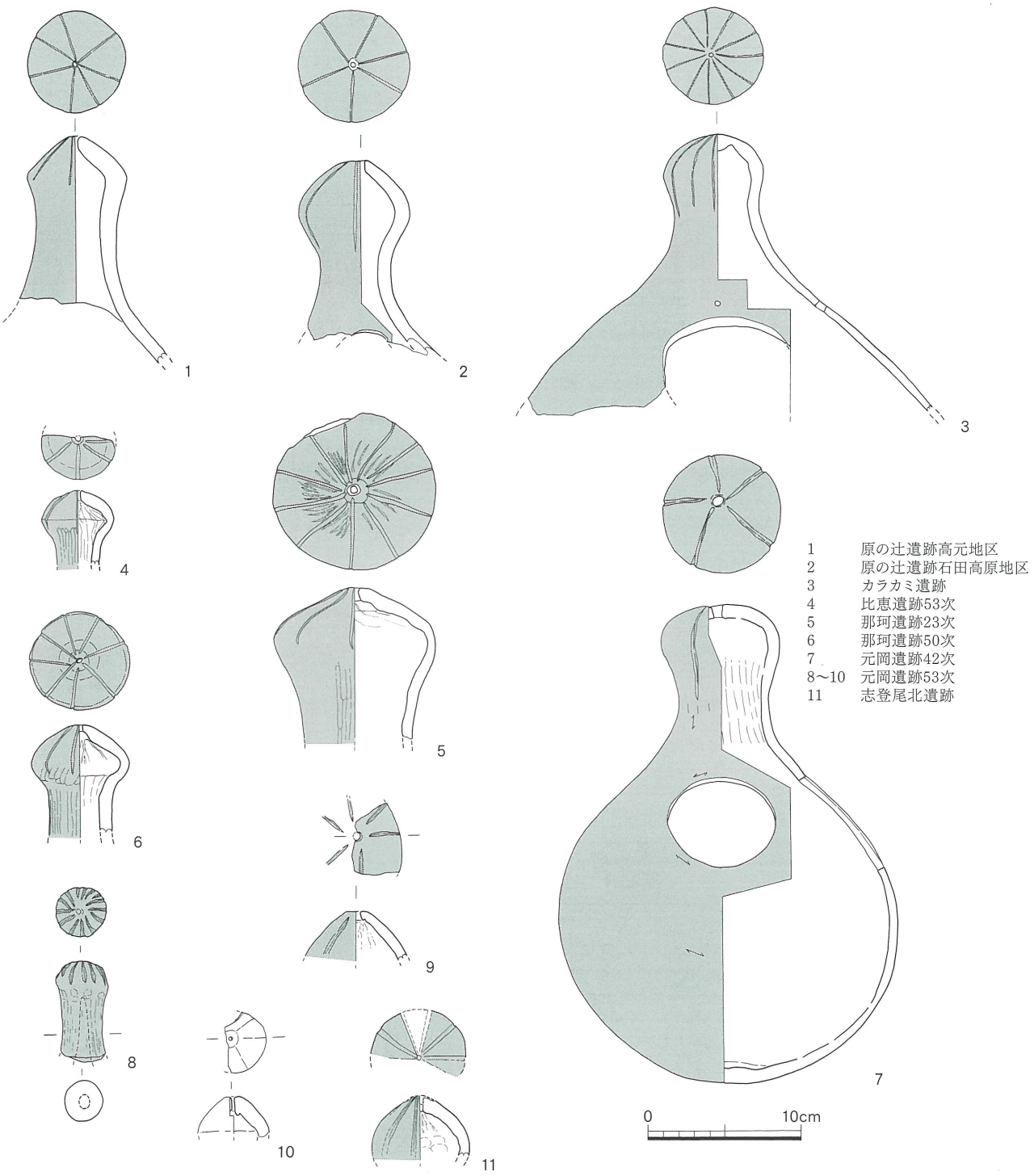
ヒョウタン形土器の研究史は常松幹雄氏によって丁寧にまとめられている（常松2007）。それによるとヒョウタン形土器が初めて出土したのは壱岐島で、鴇田忠正氏による原ノ辻上層式土器の報告による（鴇田1944）。鴇田氏の論文に掲示された図では、全形が明らかな土器が知られていない段階であったことから、現在の視点から言うと天地を逆に配して漏斗状に見立てている。原ノ辻上層式の検討を行った高倉洋彰氏も時期的な位置づけを重視したため、ヒョウタン形土器の具体的な検討は行われていないが、鴇田氏が提示した図とは天地を逆にして報告した（高倉1982）。高倉氏の報告以後、このような形で報告されていく。

同じく壱岐のカラカミ遺跡では発掘調査でヒョウタン形の上半部が出土した（正林・宮崎編1985）。その頂部には円形の凹みはあるが貫通はしていなかったため、これまで下部とされることもあった宝珠形の部分が頂部になることが明確になった。また、この段階から「瓢箪形の土器」と報告されている。

1990年代に入ると福岡市の比恵・那珂遺跡群でヒョウタン形土器の頂部が複数出土した（下村



第1図　ヒョウタン形土器出土遺跡と三雲・井原遺跡、須玖・岡本遺跡



第２図　ヒョウタン形土器実測図（1/4）

編 1992 他)。また、原の辻遺跡石田高原地区でも頂部が出土した。原の辻遺跡と比恵・那珂遺跡群例はいずれも頂部の孔が貫通するという特徴を持ちながらも、出土例がない下半部については、確定的なことが言えない段階が続いていた。

2007 年には林隆広氏が実際のヒョウタンと比較し、「宝珠形土器」はヒョウタンを祭祀具に形を現したものと指摘した。また、ヒョウタンの果

実の中にたくさん詰まっている種子が新しい生命を宿す象徴として認識されていたことも指摘し、ヒョウタン形土器は栃木県の民俗例を参考に、種もみを納めた「容器」の可能性も指摘している（林 2007）。同年、常松幹雄氏は元岡遺跡 42 次調査で完形に復元できるものが出土したことを紹介したうえで、ヒョウタンは仙人が住む霊山になぞらえられていたことから、神仙世界における依代であることを指摘した（常松 2007）。

その後、元岡遺跡 52 次調査で、3 点の頂部が出土し、うち 1 点は孔が貫通せず、ほかの 1 点は丹塗りが施されていない。2018 年には元岡遺跡の対岸に位置する糸島市志登尾北遺跡で頂部の破片が 2 点出土した。これらは接合しないが、質感等から、おそらく同一個体である。

3．事例の検討

①原の辻遺跡高元地区（鴇田 1944）

1939 年の耕地整理に伴う土取りの際に、鴇田忠正氏が土層の観察とともに土器を採取し報告したものである。研究史でも述べたが、ヒョウタン形土器は当初、漏斗形を呈する注口土器として報告された（鴇田 1944）。その後、これらの資料は壱岐の山口麻太郎宅で保管されていたが、1966 年に長崎県立博物館に移管された。高倉洋彰氏はそれらを再実測し紹介した。高倉氏はヒョウタン形土器について「現在でも類例を欠き、全形の推定は難しい」としながらも、鴇田氏の提示した図とは天地を逆にし、宝珠形の部分を上にして報告した（高倉 1982　第 2 図 1）。本例は頂部中央にある小孔を中心として放射線状に広がる沈線を施す。沈線は 7 本である。頸部のしまりは緩やかで、外面は丹塗りである。

②原の辻石田高原地区（副島・山下編 1995）

原の辻丘陵の東側の低地帯で出土した。この調査区では三重の環濠が検出されているが、包含層から出土したとされ、丘陵から流れ落ちた可能性も指摘されている（林 2007）。標高は環濠の検出面で 7 m前後である。ヒョウタン形土器の頂部のみが出土している。頂部中央に貫通する小穴があり、そこから放射線状に 6 本の沈線を配する。頸部のしまりは強く、頂部は丸みをもつ。外面に丹塗りを施す（第 2 図 2）。

③カラカミ遺跡（正林・宮崎編 1985）

カラカミ遺跡は原の辻遺跡の西に位置する集落である。川久保地区のW 10 区の方形土坑から出土しており、標高 72 ～ 73 m を測る。ヒョウタン形土器の上半部が出土し、大きく張ると思われる胴部から、丸みをもちながら頸部に至る。胴部上半には横長楕円形の窓を設け、その上には小孔をあける。頸部のしまりはゆるいが、頂部の丸みは強く葱坊主状を呈する。頂部の中央には凹みがあり、そこから 11 本の沈線が放射線状にのびる。外面は丹塗りである（第 2 図 3）。

なお、カラカミ遺跡は標高が 70 ～ 80 m を測る小高い丘陵上に所在するが、遺跡の麓を西流する刈田院川を下ると 2㎞ほどで片苗湾に至る。遺跡からもヤス、モリ、アワビオコシ等の骨角製漁撈具や楽浪系土器等も出土しており、漁撈に従事する集団が拠点にした集落で、交易等にも携わっていたと考えられる。

④比恵遺跡 53 次調査（下村編 1997）

比恵・那珂遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置する標高 5 ～ 11 m の中位段丘上に位置し、東側を御笠川、西側を那珂川に挟まれる。

この中位段丘のほぼ中央に比恵遺跡 53 次調査地点は位置する。調査区の中央に幅 2.3 m、深さ 1.1 m、断面Ｖ字形を呈する 10 号溝が南北方向にのびる。その上層から中層にかけて弥生時代

第 3 図元岡遺跡 42・53 次調査区配置図（1/2,000）

中期末の土器が出土したが、その中にヒョウタン形土器の頂部が含まれていた。本例は丸みを帯びた形態を呈し、頂部中央に小孔をあけ放射線状にのびる沈線を配する。外面は丹塗りである（第２図４）。

⑤那珂遺跡 23 次調査（下村編 1992）

那珂遺跡 23 次調査地点は遺跡群の南西側に位置し、那珂川を望む中位段丘上の先端部近くにあたる。ヒョウタン形土器は調査区の南西から北東に延びる 44 号溝から出土している。44 号溝は最大幅 2.5 m、深さ 1.2 m を測り、調査区内で 43 m確認され、東側に 200 m ほど離れた 20 次調査でも確認されていることから、丘陵を横断する直線的条溝とされる（久住 2008）。標高は検出面で 8.7 m前後である。

ヒョウタン形土器の頂部が出土しており、外面は丹塗りである（第２図５）。頂部中央には小孔があり、そこから 11 本の沈線を放射線状にのばす。頂部の径は 7㎝を測り、これまで知られているもので最も大きなものである（常松 2007）。

⑥那珂遺跡 50 次調査（下村編 1997）

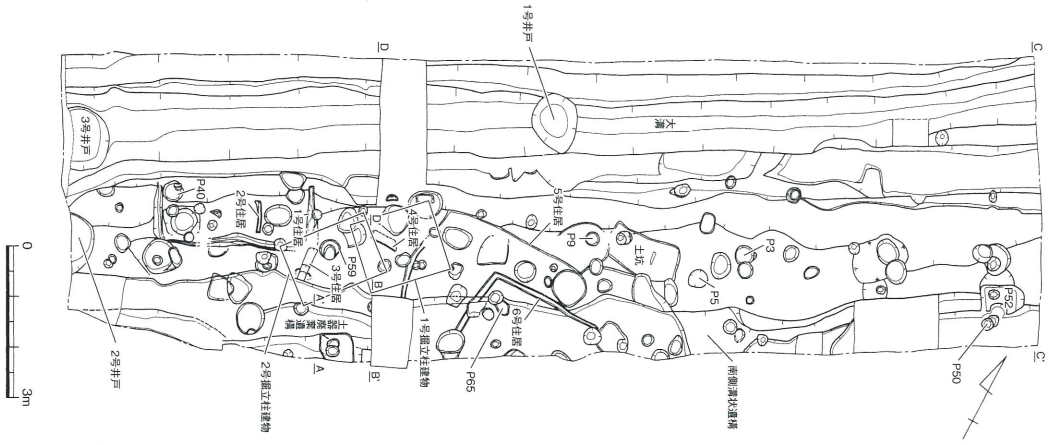
那珂遺跡の北東側にある段丘先端近くに位置する調査地点で、西に那珂川を望む。また、那珂川と調査区の間に旧水路（氾濫原推定域）が想定されている（久住 2008）。墓域を区画する祭祀土坑である３号土坑は幅 6.1 m、長さ 4.6 m以上、深さ 1.1 m を測る。標高は検出面で 7.5 m を測る。弥生時代中期後半～後期初頭を主体とする弥生土器が多く出土しているが、その中にヒョウタン形土器の頂部も含まれる。本例はしまりの強い頸部から、やや張りの強い頂部に至る。頂部中央には小孔があり、そこから８本の沈線を放射線状にのばす（第２図６）。なお、本例は頂部の径が 4.5 ㎝程度である。

⑦元岡遺跡 42・53 次調査（常松編 2018 他）

元岡遺跡は福岡市西区に所在する遺跡で、九州大学伊都キャンパスの建設工事に伴い継続的に発掘調査が行われた。42 次・52 次調査地点は南北に接しており、調査区の東西の谷筋を流れる幅 20 ～ 30 m を測る二条の大溝と溝に挟まれた丘陵部から住居跡や掘立柱建物が確認された（第３図）。標高は８～ 10 m を測るが、地形は南側に向かって傾斜する。南接する糸島市泊リュウサキ遺跡でも弥生時代後期～古墳後期にかけての集落が確認されているが、その南は糸島低地帯にぶつかる。

ヒョウタン形土器は４点出土しており、そのうち 42 次調査地点出土例は完形に復元される（米倉編 2012）。１号溝から出土した本例は高さ 31㎝、胴部最大径 22㎝を測り、その上位に直径７㎝の円形窓を設ける。頸部は短く、丸みを帯びる頂部中央には小孔を設け、そこから放射線状に５本の沈線を施す。底部は丸底で、外面は丹塗りである（第２図７）。

53 次調査地点２号溝からは３点出土した（常松編 2018）。第２図８は頸部～頂部の資料で、頂部中央に貫通しない窪みを設け、そこから放射線状に 14 本の沈線をのばす。肉厚な器壁をもち、外面は丹塗りである。本例はこれまで事例で最も小ぶりなものである。第２図９は頂部の小片である。頂部中央に小孔をあけ、その周りに放射線状に沈線をのばす。本来は６本程度あったと考えら



第４図　志登尾北遺跡遺構配置図（1/150）

れる。外面は丹塗りである。第２図10も頂部の小片である。頂部には小孔があるが、外面は丹塗りを施さず黄褐色を呈す（註１）。

⑧志登尾北遺跡（秋田編 2019）

先述した元岡遺跡とは糸島低地帯を挟んだ対面に位置する。標高は４m程度である。59号ピットと包含層からそれぞれ頂部片が１点ずつ出土した。互いに接合面はないが、土器の色調や頂部の膨らみ具合などから同一個体と判断してよいと考える（第２図11）。頂部に小孔があり、そこから放射線状に広がる沈線を施す。沈線の数は不明であるが、10本程度であろう。なお、本調査区の1/2ほどは戦国期の居館の濠で、濠の掘削時に住居跡等を破壊したため、包含層に紛れ込んだ可能性が高い。なお、第５図に示すように本調査地点は糸島低地帯に突き出す形で残る台地の先端部付近に位置し、その西側は雷山川とそれに伴う低地がひろがる。

４．ヒョウタン形土器の出土傾向とその性格

以上がヒョウタン形土器出土事例の概要である。これらから、まずわかることは常松氏も指摘するようにヒョウタン形土器は『魏志』倭人伝にある一支国・奴国・伊都国域からの出土に限られていることである（常松 2007）。それに加えるならば、比恵・那珂遺跡群の約4.5km南に控える須玖・岡本遺跡群、志登遺跡群の約4km南に位置する三雲・井原遺跡、つまり当時の王墓が築かれた２遺跡からは現段階で出土していないことも重要である。また、海へのアクセスが容易な遺跡から出土する傾向があることも共通点である。

ヒョウタン形土器は丹塗りのものが大半で、弥生時代中期後半～末にかけてみられる。この段階の丹塗磨研土器について中園聡氏は社会的要求と大陸的食器体系という外的インパクトの適合・調和の産物として成立したと指摘する（中園 1998）。また、石橋新次氏も壱岐で出土する袋状口縁壺などの祭祀土器は糸島から運ばれたとする見解を提示し、伊都国域と一支国域の密接な関係の存在を指摘した（石橋 1992）。

ヒョウタン形土器の性格について、林隆広氏や常松幹雄氏から、

①種子が多くあることから新しい生命を宿す象徴としての位置づけ（林 2007）

②翌年の豊作を願い、種もみをおさめた容器（林 2007）

③神仙思想における依代（常松 2007）

などの見解が提示されている。たしかにヒョウタンは今日でも縁起物として扱われ、魔除け・厄除けとして用いられており、両氏の見解も納得できるところが多い。

ただ、『日本書紀』に納められた説話の中にはヒョウタンがもつ別の性格を見出せるため、以下で紹介していく（註２）。

ひとつは茨田堤の築造記事である。

『日本書紀』仁徳天皇十一年

冬十月、掘宮北之郊原、引南水以入西海。因以號其水曰堀江。又將防北河之澇、以築茨田堤。是時、有兩處之築而乃壞之難塞。時天皇夢、有神誨之曰、武藏人强頸・河內人茨田連衫子衫子、此云莒呂母能古二人、以祭於河伯、必獲塞。則覓二人而得之。因以、禱于河神。爰强頸泣悲之沒水而死。乃其堤成焉。

唯衫子取全匏兩箇、臨于難塞水。乃取兩箇匏、投於水中、請之曰、河神崇之、以吾爲幣。是以、今吾來也。必欲得我者、沈是匏而不令泛。則吾知眞神、親入水中。若不得沈匏者、自知偽神。何徒亡吾身。於是、飄風忽起、引匏沒水。匏轉

第５図　志登尾北遺跡周辺の景観（●は調査地点）

「平原から黒塚へ」に関する疑問

―平原鏡の観察結果から―

角　　浩行（伊都国歴史博物館）

1．はじめに

当館の中心的な展示品に平原遺跡１号墓の出土品がある。平原１号墓（註１）は、弥生時代後期後半から終末期の墳丘墓で、銅鏡40面が出土しており、現在、国内最大の銅鏡である直径46.5㎝の内行花文鏡５面を含むことから伊都国王の墓と考えられる。

この平原１号墓出土の銅鏡（以下：「平原鏡」と表記）について、昨年、新たな研究成果「平原から黒塚へ―鏡笵再利用技法研究からの新視点―」（清水他2018）が発表された。その要旨は①平原鏡の中に鏡笵再利用技法を用いて製作されたものがある、②平原鏡の鋳型を三角縁神獣鏡の製作に再利用した可能性が高いということである。

これらの研究成果は、これまでになかった新しい視点からの成果であり、大きな衝撃を受けた。現在、最古の三角縁神獣鏡の製作は古くても３世紀半ば（註２）であり、筆者の認識では平原鏡と20～40年程度は製作の時期に差があると考えられる。このため平原鏡の鏡笵を再利用し三角縁神獣鏡を製作したとされることには、違和感を覚えた。そこで、当館に収蔵している平原鏡を観察し、再確認することとした。

2．鏡背面の観察方法と傷の概要

鏡背面に残る傷をルーペ（約３倍）で拡大し、小型のＬＥＤライトで光を当て肉眼で観察した。その結果、表面から突出または盛り上がる傷と、表面がくぼむ傷が存在した。前者を凸キズ、後者を凹キズと表記することとする。

凸キズは鋳型面がヒビ割れあるいは剥落して着いた傷の痕跡であると考えられる。一方、凹キズは鋳型面に盛り上がった部分か、または湯が回りきれなかった部分であると考えられる（註３）。

3．鏡背面の観察結果

(1) 22号鏡及び24号・26号鏡

これらの銅鏡は、平原鏡の中で鏡笵再利用技法を用いて製作されたとされる一群である。なお、25号鏡については現在、九州国立博物館に収蔵されており、今回は観察から除いている。

① 22号鏡（図版１）

鏡背面の傷は大きく３つの群に分けられる。便宜上これをＡ～Ｃ区として説明する。

Ａ区　鈕から玄武側に４カ所の傷がみられる。内区から銘帯（方の左肩）にかけてと魚文の尾から右上にかけての傷でいずれも線状の凸キズである。次に方格内の子と丑の間の乳の上部にある小さな凸キズ。四葉座の左肩から上に伸びる凹キズがある。

Ｂ区　鈕から白虎側に４カ所の傷がみられる。櫛歯文上の凸キズ。銘帯の如に接して内区側に２カ所の凹キズ。方格内の酉から鈕座にかけての凸キズ。

Ｃ区　鈕から朱雀側に15カ所の傷がみられる。最外縁の鋸歯文帯に１カ所つぶれた部分がある。その内側の複線波文帯の上下にそれぞれ１カ所ずつの凸キズ。その内側の鋸歯文帯の先端付近に凸キズ。櫛歯文帯との間の斜面に短い線状の凸キズ。櫛歯文帯に連続する線状の凸キズと凹キズ。銘帯の渇の右肩をかすめて伸びる線状の連続する凹キズと凸キズ。その先にある短い線状の凸キズ。Ｌ字文の先端付近の凹キズ。その上の朱雀の尾を縦断する凸キズ。Ｔ字文右側の乳から方格に向けて伸びる凸キズ。午の字の右側の乳下部の凸キズ。午の字の上の円弧文の右側の凸キズ。

② 24号鏡（図版２）

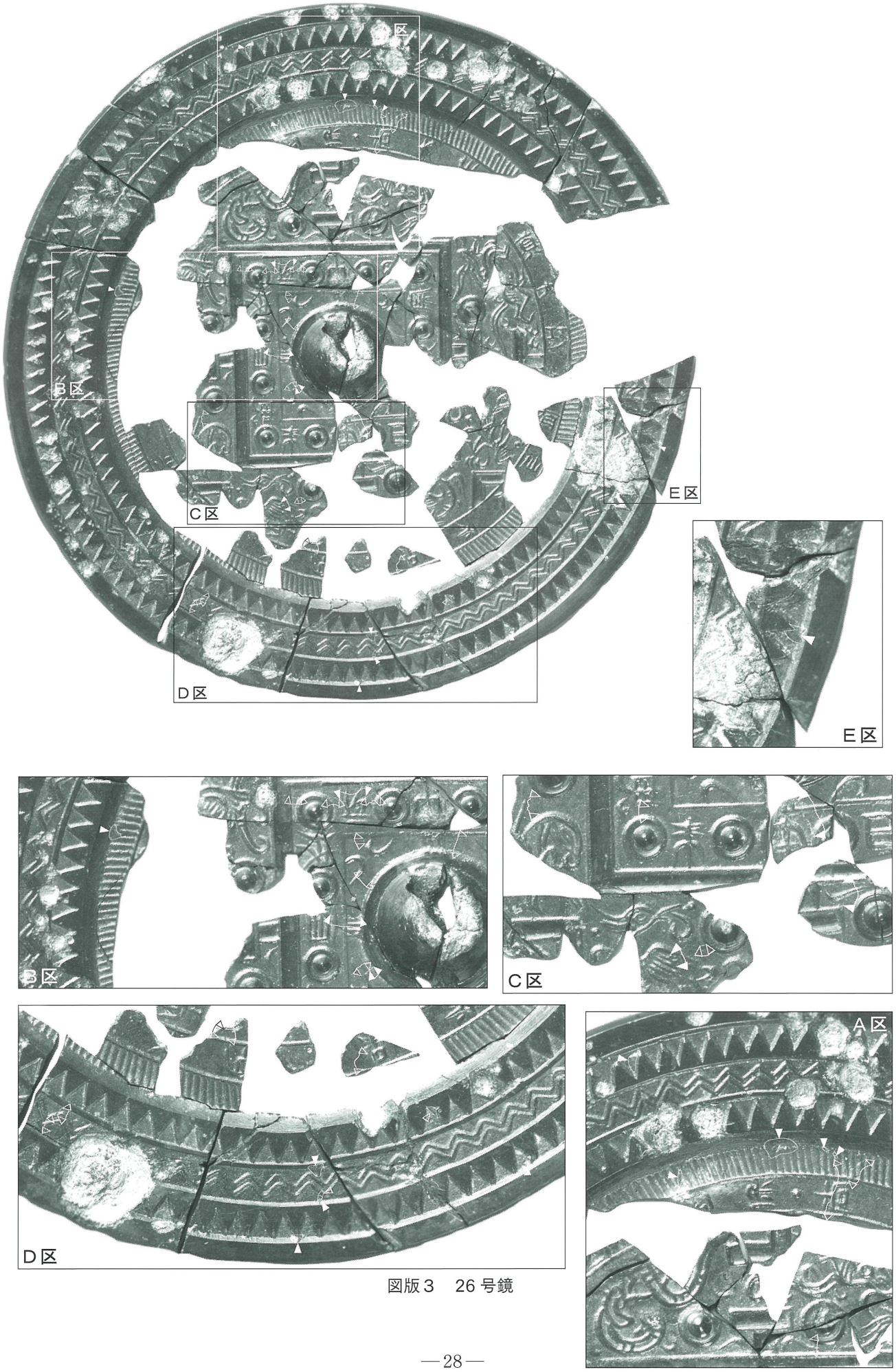
鏡背面の傷は便宜的にＡ～Ｅ区の５つに区分して説明する。

Ａ区　鈕から玄武側の外区に６カ所の傷がみられる。最外縁の鋸歯文帯に線状の凸キズ。その内側の複線波文帯の上に１カ所の凸キズ。複線波文の線上とその下に１カ所ずつの凸キズ。その下の内側の鋸歯文の先端部に１カ所の凸キズ。Ａ区の左端の最外縁の鋸歯文の先端に小さな凸キズがある。

凡例：△（白塗）　凸キズ
△（白抜）　凹キズ
←　接合部
※それぞれの記号の先端がキズ等の端部を指す。記号をつなぐ線は、キズ等の形を表す。以下、図版５まで同様。

図版１　22 号鏡

図版２　24号鏡



図版３　26 号鏡

B区　鈕を中心に青龍側を除く３方向に７カ所の傷がみられる。玄武側のＴ字文の右端の下、方格の外周線を挟んで短く連続する凸キズと凹キズが２カ所ある。白虎側の方格内の酉から鈕座にかけての凸キズ。鈕座から朱雀の尾を横切る４カ所の凸キズ。これは本来同一の笵傷である可能性が高い。

C区　白虎側の複線波文帯に線状の凸キズ。その内側の鋸歯文の先端部に１カ所の凸キズ。

D区　朱雀側の最外縁の鋸歯文帯に４カ所の傷がある。いずれも鋸歯文の先端にある凸キズで、一番左側と左から３番目の傷はやや大きく笵面が剥離したものであろう。

E区　青龍側の最外縁の鋸歯文帯に５カ所の傷がある。一番上の傷は２個の鋸歯文先端部に凹キズがあり、それに挟まれた凸キズがある。その下は２個の鋸歯文先端部にまたがるやや幅のある凸キズ。その下は鋸歯文先端部の凹キズ。その下は鋸歯文先端部のＶ字状の２カ所の凸キズとそれに挟まれた凹キズ。その下は鋸歯先端部付近の凸キズ。

③ 26 号鏡（図版３）

この銅鏡はかなり傷が多く、便宜的にＡ～Ｅ区に区分して説明する。

A区　左端の最外縁の鋸歯文の縁に凸キズがある。櫛歯文帯に左から線状の凸キズ、保の右上の外縁部にやや大きい凸キズ、その右側に小さな２カ所の凸キズがある。櫛歯文から尚を横切る凹キズと同じく尚の右下にかけて凹キズがあるが、これは一連のものである。Ｔ字文の右の乳の下から方格にかけて凹キズがある。

B区　櫛歯文帯の外縁部に凸キズがある。十二支の亥を横切る凸キズがあり、その両側に続く凹キズがある。さらに乳を挟んで左側にも凹キズが続く。鈕座の周辺には玄武側から白虎側にかけて３か所の凹キズがある。酉から鈕座に続く線状の凸キズがある。その下に鈕座に接して短い連続する凸キズと凹キズがある。

C区　白虎の首から上部の乳にかけて凹キズが、十二支の申の右肩から下部の乳にかけて凹キズがある。その下の鳳凰の羽に凸キズが、その右側の乳から短い凹キズがある。午の右上に斜めの凸キズがあり、Ｔ字文の端部から方格に接する凸キズがあるが、これは一連の傷であろう。

D区　渇の左下の内区の銘帯に接する部分に逆Ｖ字の凹キズが、知の右下から伸びる凹キズがある。内側の鋸歯文の基部に凹キズが、その左側の複線波文の上下に凸キズ２カ所と凹キズがある。さらにその左側の複線波文の上下に凹キズが２カ所ある。最外縁中央と右端の鋸歯文の先端２カ所に凸キズがある。

E区　最外縁の鋸歯文の先端に凸キズがある。

（2）前提の整理

笵傷の比較にあたって前提となる考え方を整理しておきたい。

まず、平原鏡について７組の同型鏡の存在が知られている（註４）が、その製作技法については同型技法と同笵技法の二つの可能性が考えられる。（註５）

まず、同型技法で製作された場合は、鏡笵再利用される鋳型は、複数ある鋳型のいずれか一つであるので、同型の全ての鏡の傷を比較して、判定する必要がある。次に、同笵技法で製作された場合は、最後に鋳造された鏡の傷と鏡笵再利用により製作された鏡の傷が一致することになる。

また、鏡笵再利用の根拠となるのは鋳型面の傷であるが、これが鋳造された銅鏡に残る場合は凸キズとして残ると考えられる。銅鏡の鏡背面にある傷には、凸キズと凹キズがあるが、凹キズは鋳型面に盛り上がった状態である（註６）ため、鏡笵再利用時に鋳型面を削り込めば、再利用して製作された鋳型の鏡背面には傷として残らないことになる。よって、鏡笵再利用の判定の対象となるのは凸キズであると考えられる。

（3）鏡背面の傷の比較（図版６）

そこで、各鏡の凸キズのみを抽出した。

まず、22 号鏡と 24 号鏡を比較してみると、一致するものは十二支銘の子の右側の乳と方格の間にある小さな傷がある。その他、酉と鈕座の間にある短い傷は形が違うが一致する可能性がある。また、鈕座から朱雀方向の傷が形は違うが、位置的には同一のものである可能性がある。その他は一致すると確認できるものは無い。

次に、22 号鏡と 26 号鏡では、酉と鈕座の間にある短い傷と、鈕座から朱雀方向の傷が一部確認される。これらが一致する可能性が考えられる。

この観察結果からは、「平原から黒塚へ」で認定されている傷Ａの一致は認められず、傷Ｂにつ

いては同じ位置に傷があるものの一致するとは言えない。また、傷Cについては酉と鈕座の間の短い部分のみが一致する可能性が残される。

このような結果であったため、22号鏡と24号鏡・26号鏡間の鏡笵再利用については証明されたとは言えないのでないかと考える。(註7)

(4) 3号鏡・4号鏡

これらの銅鏡の鋳型は、鏡笵再利用技法によって三角縁神獣鏡の鋳型が製作されたとされるものである。

①3号鏡(図版4)

この銅鏡も便宜的にA～D区に区分して説明する。

A区　龍雲文に縦に連続する5カ所の凹キズがある。T字文の左の乳の右下から方格にかけて、細い凹キズがある。

B区　龍雲文のくぼんだ部分に4カ所の凸キズと文様部に1カ所の凹キズがある。なお、「平原から黒塚へ」でT字文の上の乳の左に接し、L字文の先端付近まで続く傷とされたものは、破片の接合部分である。このことは裏面の観察で確認したものである。

C区　T字文の左の辟邪の上の角を縦断する短い凸キズとそれにつながり、後頭部の後ろを首の後ろまで続く凹キズがある。さらに、それにつながり後頭部に接し、胴体を縦断し、銘帯に及ぶ凸キズがある。銘帯を挟んで櫛歯文帯を縦断する凸キズと龍雲文に連続する3カ所の凹キズがある。また、V字文の頂点を挟んで短い凹キズと銘帯や櫛歯文帯に短い凸キズがある。

なお、「平原から黒塚へ」で鈕座左下から未の左側をかすめて銘帯付近まで延びる傷とされたものは、破片の接合部分である。

D区　青龍横の乳を挟んで縦に短い凹キズがある。それとT字文を挟んだ乳の右下から縦方向の凸キズがあり、同じ乳の右側には三角形の凸キズがある。その凸キズから正体不明獣の尾を横切り銘帯の寿に至る凸キズがある。鋸歯文の一部に文様のつぶれがある。

②4号鏡(図版5)

この銅鏡は便宜的にA～C区に区分して説明する。

A区　龍雲文の外側から中ほどにかけて凹キズがあり、その下の端部付近に2カ所の凹キズがある。それに続くように龍雲文の中ほどから鋸歯文の先端部にかけて連続する3カ所の凸キズがある。櫛歯文帯を縦断する凹キズと銘帯にも凸キズ、凹キズがそれぞれ1カ所ずつある。T字文の右の乳から振返り獣付近にも2カ所の凸キズと4カ所の凹キズがある。T字文の左の乳の右下から鈕座に至る3か所の凹キズと1カ所の凸キズがある。

B区　龍雲文の外側から中ほどにかけて4カ所の凸キズとその間に1カ所の凹キズが並ぶ。龍雲文の内側から鋸歯文の先端にかけて2カ所の凹キズと1カ所の凸キズが並ぶ。櫛歯文帯の外側斜面から銘帯に至る凸キズと銘帯に接する短い凸キズがある。L字文の右上に2カ所の凸キズがある。

C区　十二支銘の未の左下から方格にかけて短い凹キズがあり、それに続くように内区の辟邪の頭部の右側を通り、胴体を縦断し、櫛歯文帯に至る凸キズがある。また、その左側の方格の角からV字文の角に至る凸キズと凹キズがある。

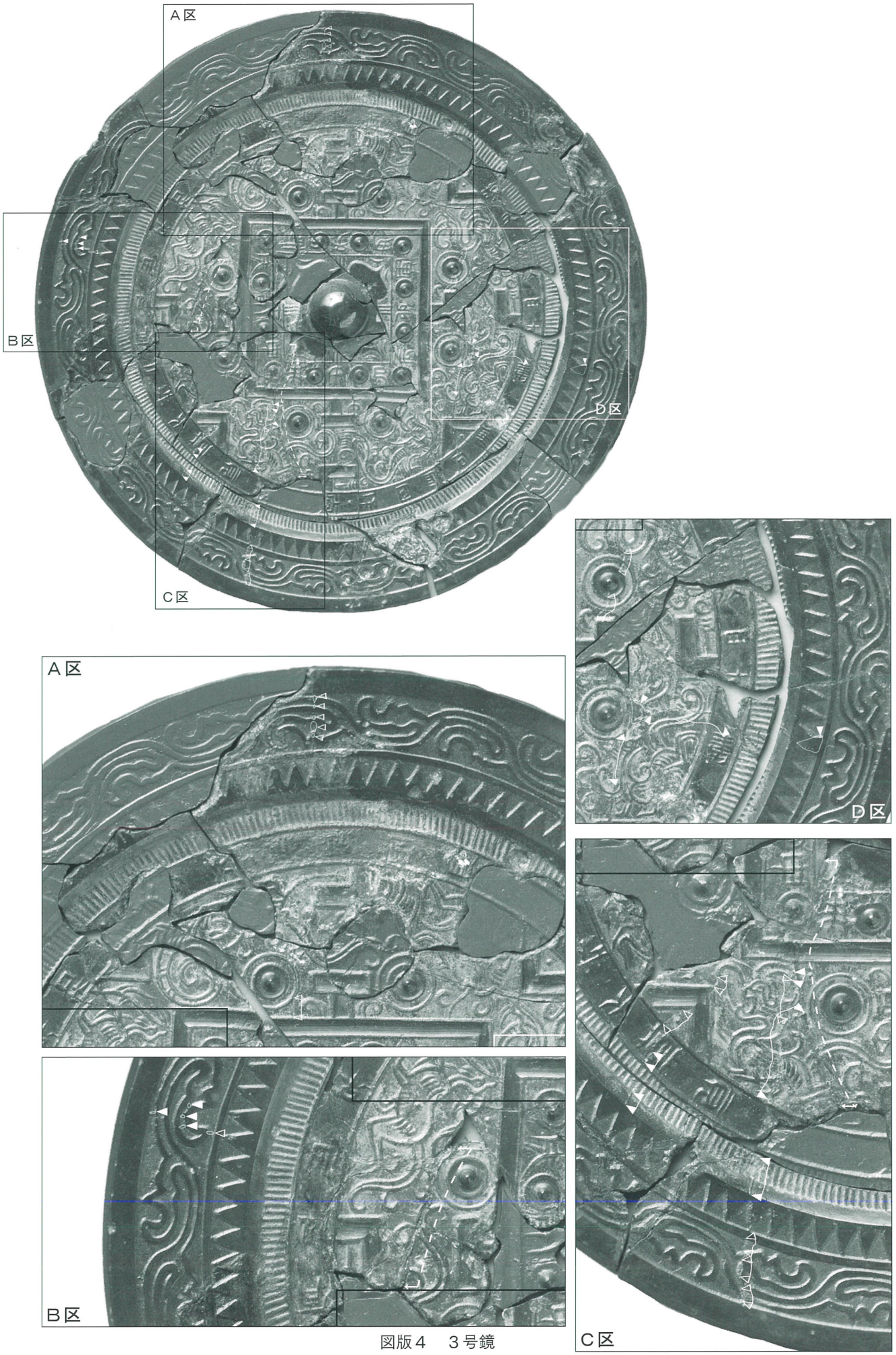
(5) 三角縁神獣鏡との笵傷の比較(図版6)

まずは3号鏡、4号鏡の凸キズのみを抽出して、その結果と「平原から黒塚へ」に掲載された三角縁神獣鏡40鏡群の傷A～Dを比較してみたい。

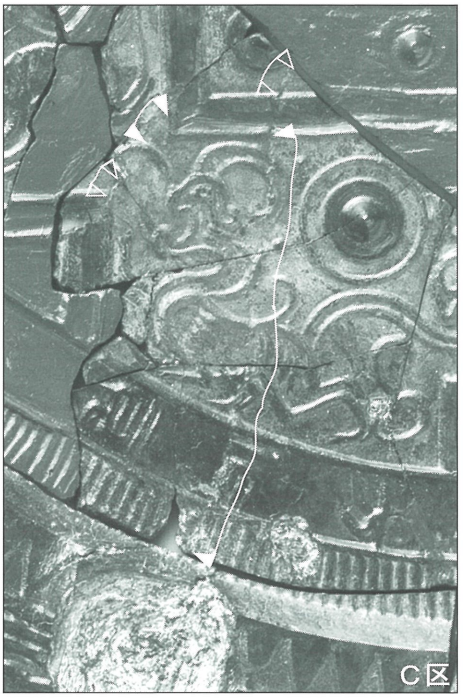
3号鏡では傷Aは認められず、傷Bについては青龍側のT字文下の乳から銘帯に至る傷が、形は違うが部分的に一致する可能性がある。傷Cについては朱雀側の辟邪を縦断し銘帯に至る傷と櫛歯文帯の傷が部分的に一致する可能性がある。傷Dについては龍雲文縁の小傷のいずれかが一致する可能性がある。

4号鏡では傷Aは龍雲文縁の一部の傷と一致する可能性がある。傷Bについては欠損のため確認できない。傷Cについては朱雀側の辟邪を縦断し櫛歯文帯に至る傷が部分的に一致する可能性がある。傷Dについては龍雲文縁からT字文の間にいくつかの傷があり、そのいずれかが一致する可能性がある。

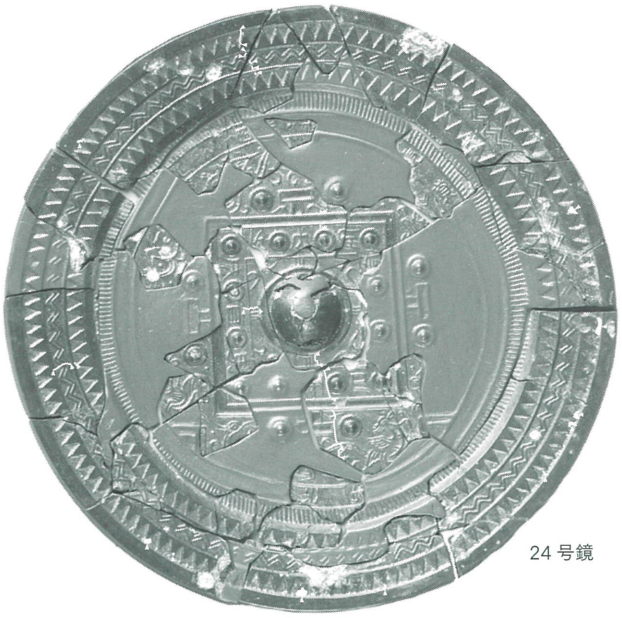
この結果から見ると「平原から黒塚へ」で示されたように平原3・4号鏡と三角縁神獣鏡40鏡群の傷について確実に一致するものはなかった。そのため現状では平原鏡と三角縁神獣鏡の間の鏡笵再利用の可能性が高いとは言えないのではないかと考える。



図版４　３号鏡



図版５　４号鏡

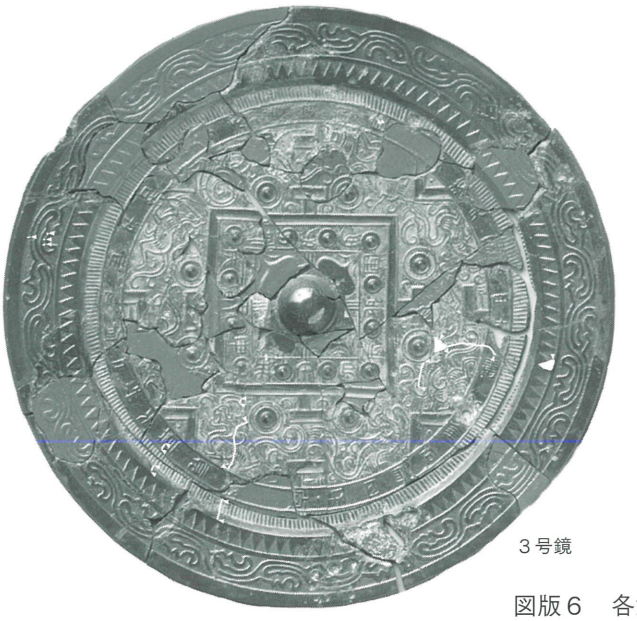


24 号鏡

26 号鏡

22 号鏡

※本図版でも記号の先端が凸キズの端部を指すが、キズの形を表す線はわかりやすいように凸キズの位置と一致している。



3 号鏡

4 号鏡

図版 6　各銅鏡の凸キズ

4．まとめ

平原鏡の観察結果から①平原鏡の中に鏡笵再利用技法を用いて製作されたものがあるという点については証明されたとは言えないと考える。また、②平原鏡の鋳型を三角縁神獣鏡の製作に再利用した可能性が高いという点についてもまだまだ課題があると考える。

しかしながら、前述の２点について否定されたとも考えてはいない。

鏡笵再利用関係の認定は鋳型面の傷の一致がその根拠となるが、これを認定するにはどの程度一致すればよいのだろうか。鏡笵再利用時に鋳型面を削り込むことによってなくなる傷があるとすれば、どの程度傷が一致すれば鏡笵再利用を認めてよいのだろうか。

三角縁神獣鏡 40 鏡群を例にとると「平原から黒塚へ」で認定された傷Ａ～Ｄとぴったり一致すれば認定してもよいと思われるが、例えば今回の観察結果では一部の傷は一致する可能性は残されているため、どの程度傷が一致すれば鏡笵再利用を認めてよいのか整理する必要があるのではないかと考える。

また、「平原から黒塚へ」で三角縁神獣鏡の製作順を 100b 鏡群→ 67 鏡群→ 40 鏡群の順とされているが、平原鏡から鏡笵再利用されて作成されたものは最も新しい 40 鏡群であるとされている。もし、再利用されたのであれば、最も古い 100 b 鏡群が作られたということになるのではないか。

以上、述べたようにいくつかの疑問点があるが、鏡笵再利用の視点は有効な視点であると考えられるため、今後も検討してゆくべき課題があると考える。

謝辞

本論の執筆にあたり辻田淳一郎（九州大学）氏には、三角縁神獣鏡についての現状の研究成果並びに関連文献についての、平尾和久（糸島市教育員会）氏には関連文献についてのご教示を受けた。記して感謝申し上げます。

【註】

1　平原遺跡にかかる調査報告書は３冊（原田 1992、柳田・角編 2000、岡部編 2017）がある。
2　辻田淳一郎氏よりご教示を受けた。
3　藤丸氏の「鋳潰れ」（藤丸 1997）に相当するが、本論では鋳型面の異常の可能性も残しておきたい。
4　１組は超大型内行花文鏡で、残り６組は方格規矩鏡である。（柳田 2000）
5　同笵と考える研究（清水 2000・柳田 2002）があるが、同型の可能性も残しておきたい。
6　鋳型に由来する場合であり、「鋳潰れ」の場合もある。
7　今回、25 号鏡は観察していないので、これについての鏡笵再利用の可能性は残されている。

【参考文献】

岡部裕俊編 2017『新訂版　国史跡曽根遺跡群　平原遺跡』糸島市文化財調査報告書 第 16 集
清水康二 2000「「平原弥生古墳」出土大型内行花文鏡の再評価」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』
清水康二 2015「初期三角縁神獣鏡成立過程における鏡笵再利用」『古代文化』67-1
清水康二・宇野隆志・清水克朗・菅谷文則・豊岡卓之・小林加奈恵 2018「平原から黒塚へ―鏡笵再利用技法研究からの新視点―」『古代学研究』215
原田大六 1992『平原弥生古墳　大日霊貴の墓』上・下巻 平原弥生古墳調査報告書編集委員会
藤丸詔八郎 1997「三角縁神獣鏡の製作技術について－同笵鏡番号 60 鏡群の場合－」『研究紀要』Vol.4 北九州市立考古博物館
柳田康雄・角浩行編 2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書 第 70 集
柳田康雄 2000「Ⅳ　平原王墓出土銅鏡の観察総括」『平原遺跡』前原市文化財調査報告書 第 70 集
柳田康雄 2002「摩滅鏡と踏返し鏡」『九州歴史資料館研究論集』27

怡土城出土の瓦塼類に関する一考察

―金龍寺所蔵資料の紹介をかねて―

江崎　靖隆（伊都国歴史博物館）

1．はじめに

怡土城は糸島市と福岡市とが境を接する高祖山（標高416 m）の西斜面一帯に城域をもつ古代山城である（第1図）。『続日本紀』によると、天平勝宝8年（756）年6月から神護景雲2（768）年2月の約12年の歳月を要して完成し、築城の担当は、当初は吉備真備、途中から佐伯今毛人に交代をしたが、大宰府の反対を押し切って防人までも動員し、築城を急がせて完成させている。

現在、確認されている主要遺構は、高祖山西側低地を巡る土塁及び5か所の城門、北側の尾根沿いに第1～5号望楼跡、あと、怡土城郭内に、縣庄礎石群、社辺礎石群、一丁月見礎石群、一ノ坂礎石群が確認されている（第2図）。

伊都国歴史博物館では、築城1250周年、国指定80周年を記念して、平成30年度冬季企画展は「怡土城」を題材とした企画展示を開催し、その過程の中で、怡土城出土瓦塼類の再整理を行った。

また、平成29年度には、鏡山猛氏が昭和11（1936）年に調査を行った金龍寺所蔵資料が同寺で発見された。これらの資料は、全て未図化であったため、怡土城関係瓦塼類を対象に、写真撮影を行い図化することに務めた。

本稿は金龍寺所蔵資料の紹介とともに、一連の怡土城出土瓦塼類の再検討を通じて得られた新知見を報告するものである。

なお、既に報告されている資料については、詳細は省略することとし、瓦塼類の分類については『大宰府政庁跡』、235型式の笵傷の進行状況については、中村和博氏により、Ⅰ～Ⅹ期に細分されており、これに準拠することする（九州歴史資料館2002、瓜生2006、中村2008）。

2．金龍寺所蔵資料について

昭和11（1936）年に行われた鏡山猛氏による怡土城の調査は、文献から表採資料の調査、各礎石群、城門、土塁の調査など多岐にわたる（鏡山1937）。怡土城関係遺物の調査は、怡土小学校所蔵資料、金龍寺所蔵資料、奈良﨑要氏所蔵資料、笠敬氏所蔵資料を対象に行われた。このうち、平成29年度に金龍寺所蔵資料が、同寺の倉庫から発見され、伊都国歴史博物物館へ寄贈を受けたことにともない、資料の整理、調査を行ったので、ここで報告したい（第3～5図）。

1は丸瓦部分を欠損している軒丸瓦で、鏡山報告の図版3－2（左）である。瓦当との接合は、半月形の丸瓦を瓦当の周縁まで入れている。復元直径17.4㎝、蓮子数は1＋8、弁数はF8T1、口縁文様はS24で、弁区径が11.4㎝であることから235型式である。笵傷は瓦当部分が欠損しているが、1，2の笵傷痕跡を確認できる。

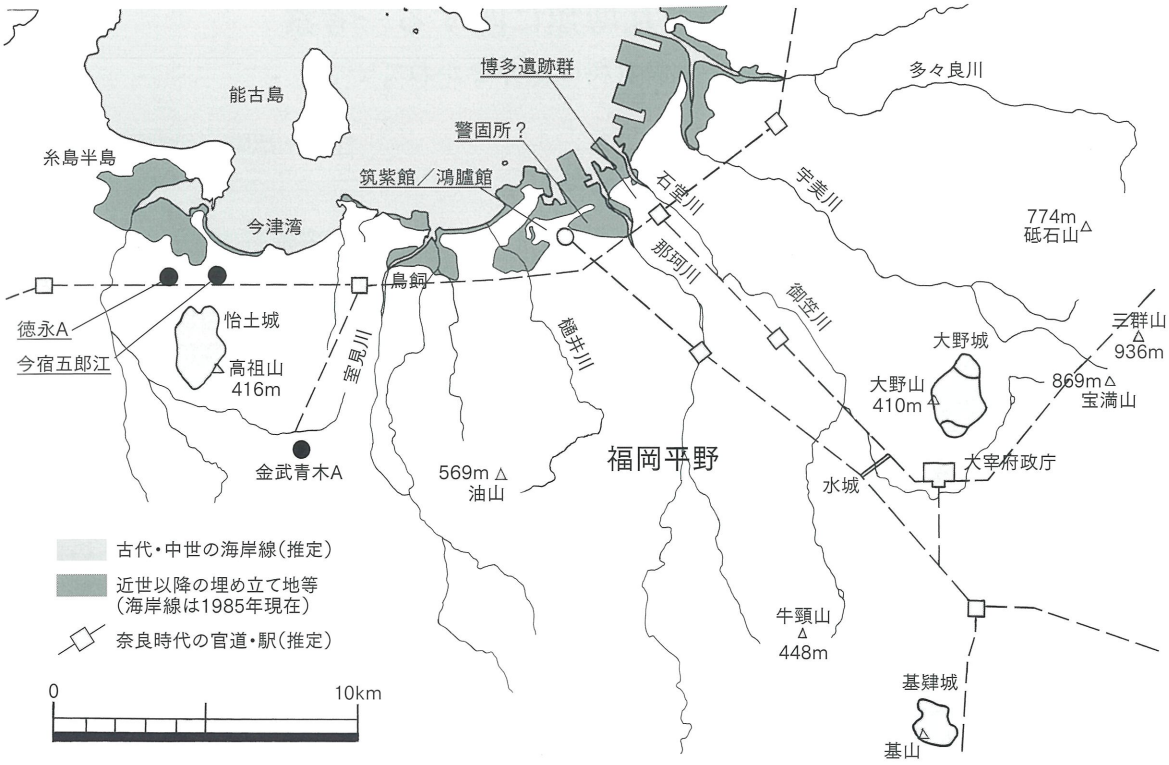
2は斜格子文丸瓦で、胴部と玉縁の一部のみの残存である。鏡山報告の図版3－2（右）に該当する。外面は長手叩打具による斜格子打捺痕、内面は布目痕である。残存長9.6㎝、残存幅10.6㎝、厚さ2.4㎝を測り、両面共に明灰色である。

3は方形塼で、完形であるが、無文で装飾文様が無い。1枚造りであり、4つの角には、粘土板を2枚接合した跡が確認でき、上面、側面は斜格子状にタタキ調整、下面はナデ調整で仕上げており、タタキをナデ消していない。長さ20.2㎝、幅21.0㎝、厚さ4.1㎝を測る。

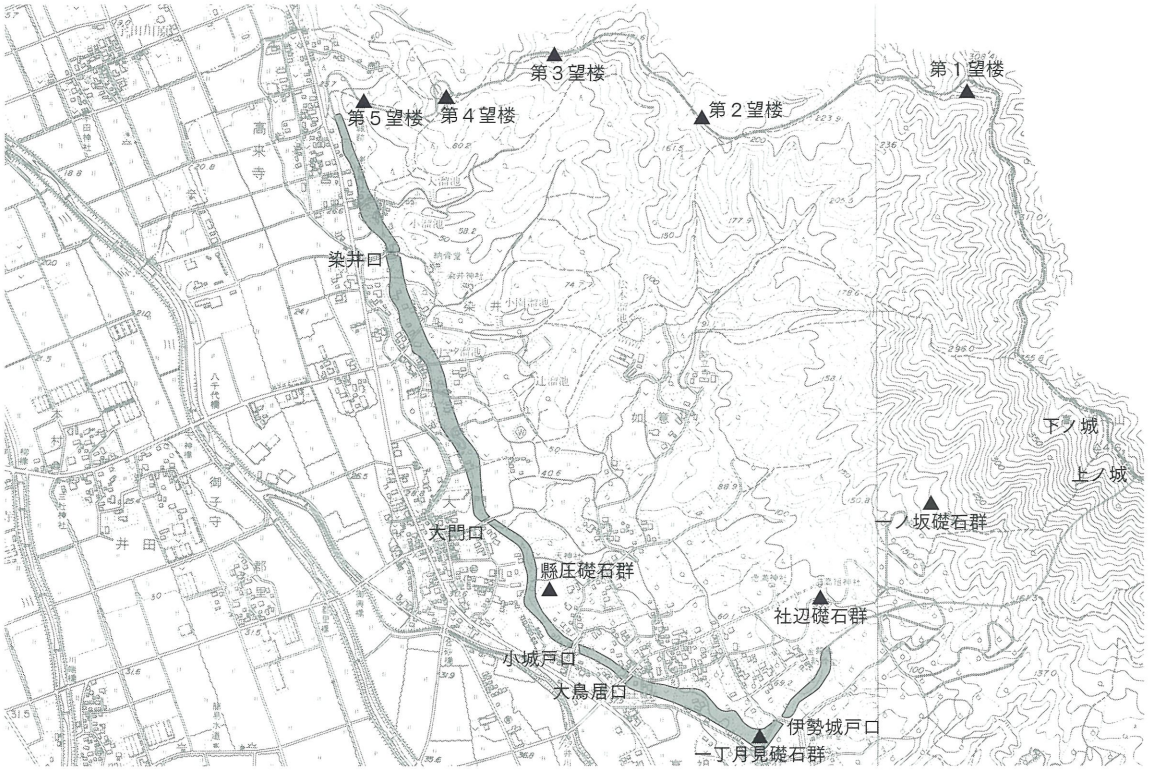
4～20は平瓦で、いずれも1枚造りである。凸面は縄目タタキ、凹面は布目痕を残し、側面はヘラ削りで面取りされる。焼成は還元焼成が甘いものが多く、明褐色を呈するものが多い。塼と同じく瓦笵に粘土板を2枚重ねて製作するものが主流を占めるが、11のように、厚さ2.3㎝の粘土板と厚さ2.7㎝の粘土板を組み合わせるなど厚さの異なる粘土板を組み合わせている。また、14、16～20のように粘土板を1枚だけで成形した厚さ1.7～2.3㎝程度の薄いものも存在する。

3．怡土城出土瓦塼類について

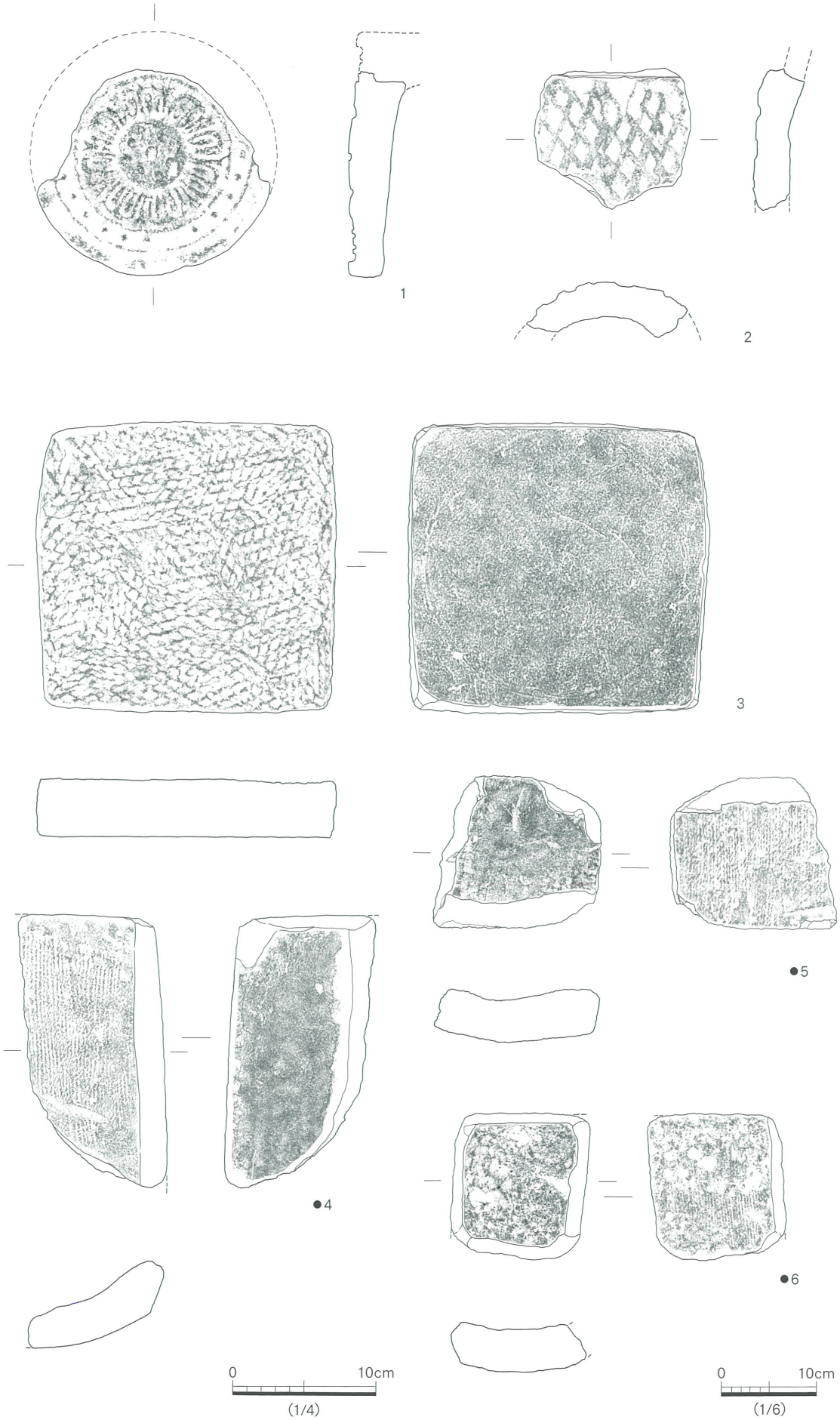
ここでは、怡土城出土の瓦塼類について、その



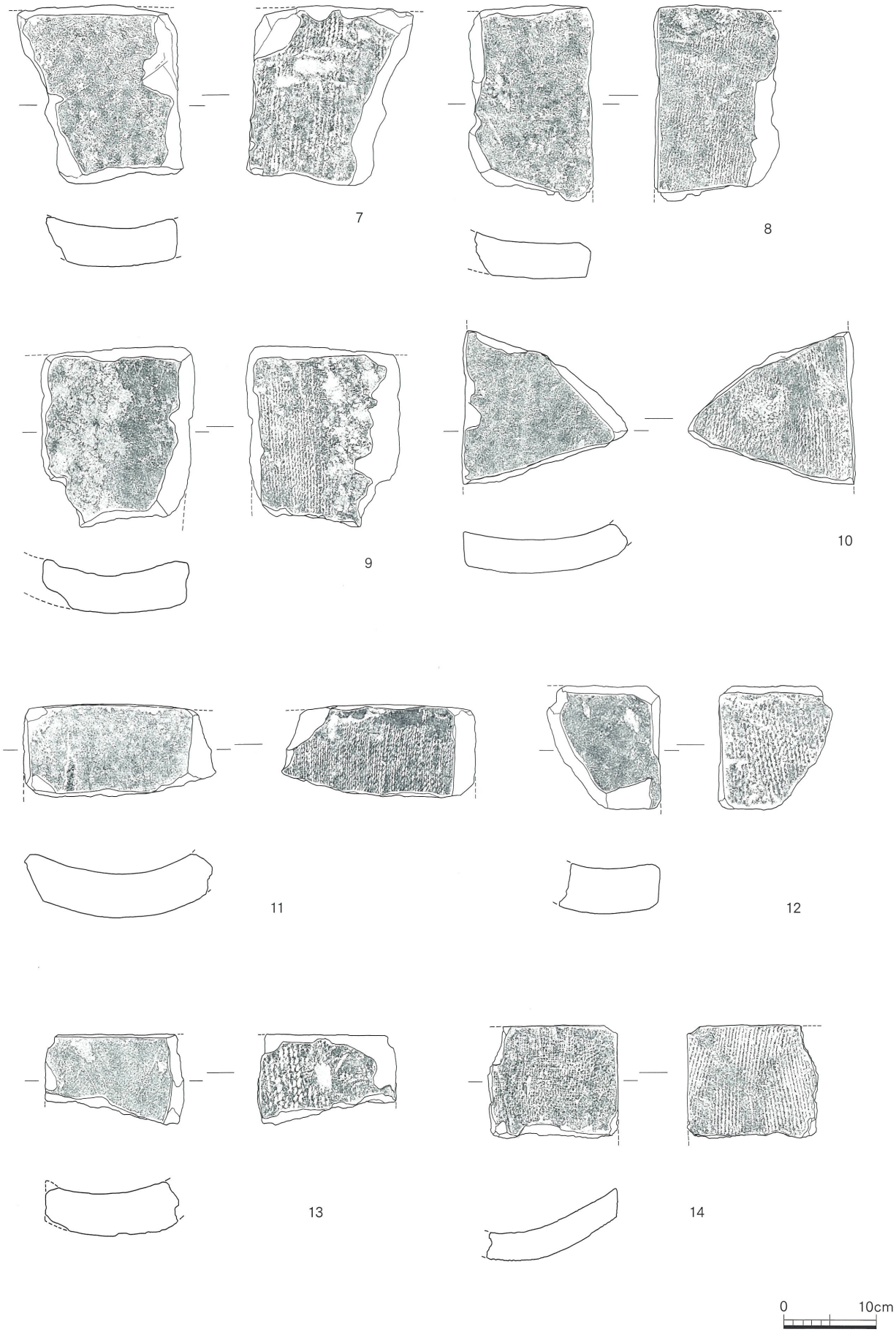
第１図　怡土城と周辺遺跡（1/400,000）（ブルース・バートン 2007 の図１に加筆）



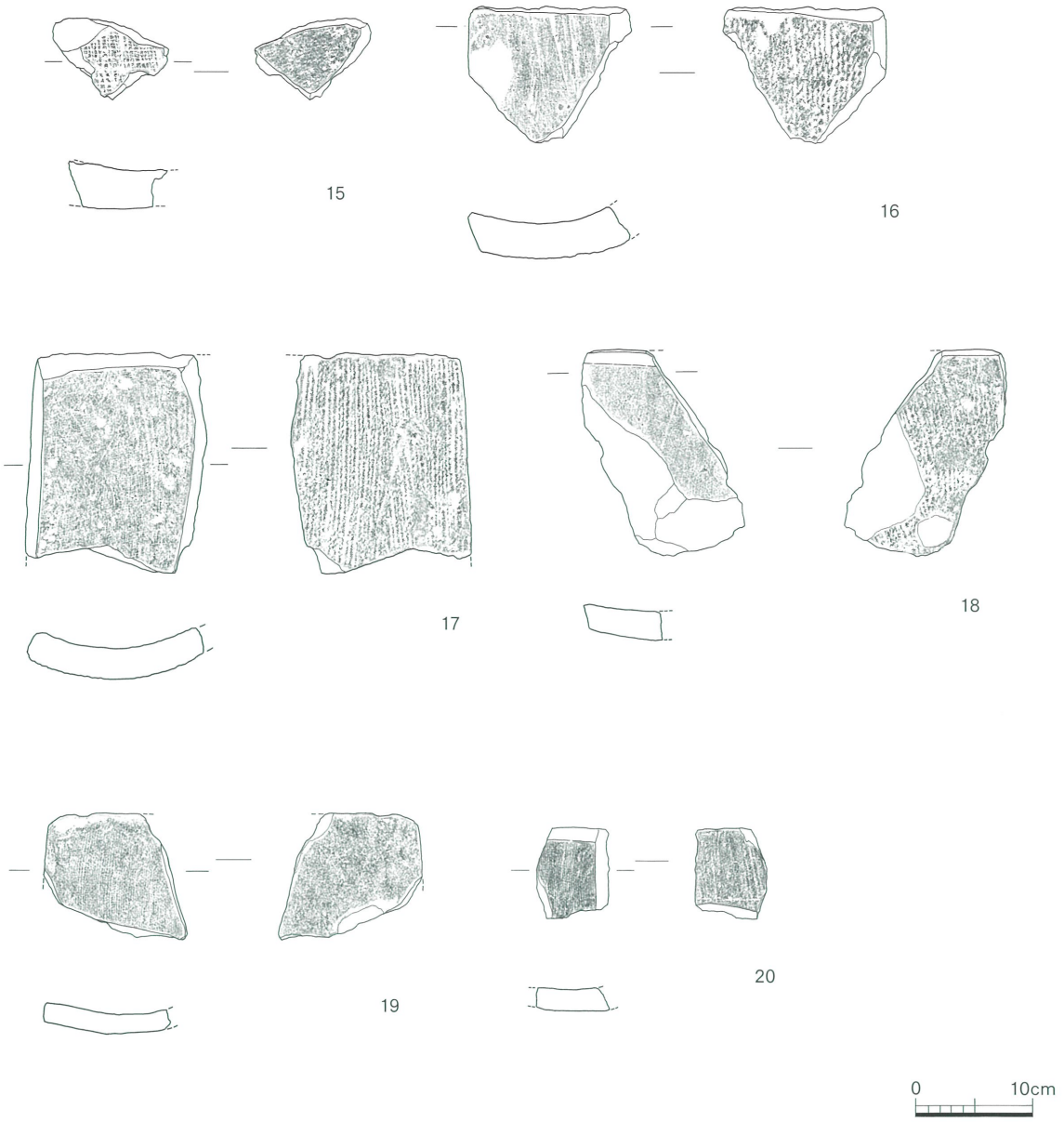
第２図　怡土城の主要遺構位置図（1/20,000）



第３図　金龍寺所蔵資料実測図①（1/4、●は 1/6）



第４図　金龍寺所蔵資料実測図②（1/6）



第５図　金龍寺所蔵資料実測図③（1/6）

代表的な遺物を取り上げ、説明していきたい（第６図、写真１、２）。

（1）塼

怡土城出土の塼は、第５望楼から出土した直方体塼（２，３）と鏡山報告の正方形塼（１）がある。直方体塼は、長さ 32 ～ 33㎝、幅 19 ～ 20㎝、厚さ８～ 9㎝とほぼ同大で、箱状の瓦笵で、粘土板２枚を使用し、成形している。一方、正方形塼は１点しか出土してなく、長さ 20.2㎝、幅 21.0㎝、厚さ 4.1㎝を測る。調整はタタキのままナデ消すことをしていない。

怡土城出土の塼は、いずれも無文で、蓮華文などの装飾文様がない。大宰府政庁における使用例から、基壇の化粧として使われたと考えられるが、怡土城のような防衛施設には、装飾塼のような華美な塼は求められなかった可能性がある。

（２）鬼瓦

怡土城からは、大宰府式鬼瓦が４点出土しており、型式はⅠ式Ａ、Ⅱ式、Ⅲ式Ｂである。このほかに、大圓寺所蔵の大宰府式系鬼瓦がある。

Ⅰ式Ａ（４）は、１点のみの出土である。糸島市末永字松ヶ浦の立花久松氏の自宅裏手にある畑より採取されたもので、鏡山報告の図版３－１（中央）に該当する。

資料は２つの破片からなるが、全体的に磨滅が著しく、２片の摩耗具合も同じであることから、本来は同一の個体と考えられる。詳細に見ていくと、左上部の眉間から眉、珠文にかけて摩耗が右半分よりも若干進んでいない。また、もう一つの破片も左下の犬歯から珠文にかけて同様の傾向を示している。このように、左右の摩耗具合がわずかに異なるが、自然摩耗によるものであろう。

Ⅰ式Ａは、大宰府政庁跡を中心に水城正門付近、水城跡御笠川右岸付近、大野城太宰府口城門跡で出土し、大宰府政庁Ⅱ期の創建期に造られた鬼瓦として認識されている。怡土城出土例から７世紀後半～８世紀中頃と比較的長い瓦笵の使用が見積もられている（毛利 1980、栗原 1995）。近年の研究においては、井形進氏が当鬼瓦の摩耗が著しいのは自然的なものだけではなく、笵そのものの劣化によるものであるとし、Ⅰ式Ａは、８世紀第１四半期までの製作で、怡土城築城の頃には製作されなかった可能性が指摘されている（井形 2018）。しかし、前述したように、当鬼瓦を実見する限りでは、笵傷が無く、全体的な摩耗が笵の劣化を示しているのかどうかを証明するのは難しいのが現状であろう。

Ⅱ式（写真１）は、先述したⅠ式Ａ鬼瓦と同地点から採集された１点で、表面の一部が剥落し、自然的な摩耗が著しい。空豆形の怒り目と上顎には現状では犬歯を含めて５本が確認できる。また眉間には釘穴が穿たれている。Ⅱ式は大宰府政庁跡、観世音寺、三宅廃寺、杉塚廃寺、弥勒寺跡、肥前国分寺跡など筑前を中心に豊前、肥前と広範囲に分布が認められる。Ⅰ式とⅡ式はほぼ同時期に存在していると考えられており、表採資料であるが、Ⅰ式とⅡ式が同地点で採集されていることは興味を引く所である。

Ⅲ式Ｂ（５）は、第４望楼から出土した鬼瓦片１点で、外縁の珠文が小さく、間隔が密で口端の巻髭表現が無い。Ⅲ式Ｂは大宰府政庁第 15 次調査や鴻臚館で出土しており、政庁第Ⅲ期再建期に当てる説と奈良時代の範囲で考える説に分かれている。いずれにしてもⅠ式Ａ、Ⅱ式よりも型式的に後出するものと考えられている。

６は大圓寺所蔵の鬼瓦で、詳細は既に報告されているので、ここでは省略するが、北浦廃寺出土鬼瓦との類似が指摘されている資料である。粘土板に顔の各部位を貼り付ける平面的な仕上がりとなる手作りの鬼瓦で、太宰府式系鬼瓦である。小田富士雄氏は太宰府系の憤怒相の脱化形式と考えて、９世紀代に比定している（小田 1981）。

このように、怡土城は、大宰府式鬼瓦がⅠ式、Ⅱ式、Ⅲ式と継続する形で確認でき、その後も大宰府式系鬼瓦が供給されるなど、大宰府政庁の鬼瓦変遷と基調を同じくしている点は重要である。特にⅠ式Ａは大宰府政庁や大野城、水城など重要施設からしか出土しないことから、怡土城は大宰府指揮下のもとに築城された重要防衛施設と考えられる。

（３）軒丸瓦

怡土城出土の軒丸瓦は、中山平次郎氏が考古学雑誌で報告した資料と鏡山報告資料、大圓寺所蔵資料、高祖榎町遺跡出土例の計５点が存在する。

７は糸島市高祖に在住する上原氏が高祖山で採集したもので、中山平次郎氏が『考古学雑誌』に報告した軒丸瓦である（中山 1916）。瓦当文様の拓本図を見ると、直径約 17.2㎝、蓮子数は不明、弁数は F8T1、口縁文様は S24 であることから、235 型式と考えられる。８は鏡山猛氏が怡土城関係資料を調査した際の軒丸瓦で、『怡土城址の調査』で報告されている（鏡山 1937）。復元直径 17.4㎝、蓮子数は１＋８、弁数は F8T1、口縁文様は S24 で、弁区径が 11.4㎝であることからこれも 235 型式である。９は高祖榎町遺跡の６号甕棺内埋土から出土した軒丸瓦１点と須恵器の高台付杯３点である（角 1995）。軒丸瓦は復元直径 17.6㎝、蓮子数は１＋８、弁数は F8T1、口縁文様は S24 で 235 型式である。共伴した須恵器の高台付杯は、８世紀中頃～後半に比定でき、235 型式が８世紀中頃に使用されたと考えられていることと矛盾しない。写真２の左右の軒丸瓦は、大正時代に、糸島史談会会長であった木下讃太郎氏によって採集された軒丸瓦で、大圓寺（福岡市中央区唐人町）が所蔵していたが、盗難に遭い現在では写真しか残っていないのが残念である。写真２の右の軒丸瓦で、瓦当部分を見ると、弁数 F8T1、口縁文様は S24、中房の蓮子数は不明であるが、235 型式の可能性が高い。写真２の左の軒丸瓦は、破片資料であるが、複弁であることと中房の蓮子数が１＋８であることから、これも 235 型式であろう。

このように、怡土城から出土する軒丸瓦を概観したが、その特徴としては、235型式に限られ、他の型式を含まないこと、235型式とセットとなる637a型式の軒平瓦が全く出土しないことである。

235型式は、鴻臚館Ⅱ式とも呼ばれ、瓦当の特徴は、中房が223型式と比較して1＋8になり、蓮弁が複弁7弁＋単弁1弁という変則的な文様を呈することである。出土例をあたってみると、太宰府政庁跡からの出土はなく、観世音寺、筑前国分寺、筑前国分尼寺、水城に見られ、限られた施設で出土するという特徴が見られる。

この軒丸瓦は、筑前国分寺の調査では104点以上が出土し、出土率の36％を占めており、極めて出土率が高かったことから、筑前国分寺創建期専用の瓦として誕生し、軒平瓦637a型式とセットになることが明らかとなっている（石松1993）。

小田富士雄氏によると、筑前国分寺は天平十八（746）年～天平勝宝8（756）年までに創建された（小田1970）。その造瓦集団は、太宰府系工人が中心であり、235型式は観世音寺や国分尼寺にも供給され、746年の観世音寺創建以降は、観世音寺系工人が中心になるとされ、造瓦集団が変わった可能性が指摘されている（中村2008）。また、746年の観世音寺創建以降は、瓦の流通のあり方も変わり、軒丸瓦は軒丸瓦だけ、軒平瓦は軒平瓦だけの流通が始まり、軒丸瓦と軒平瓦のセット関係が崩れることが指摘されている（主税2019）。

このことから、怡土城の築城は、筑前国分寺の創建後すぐに始まっていることから、この観世音寺系工人が主に生産する235型式が、そのまま供給されたものと考えられ、軒平瓦637aの供給はなかったものと考えたい。したがって、怡土城の築城にあたっては、急を要したこともあって、新たな軒丸瓦の創出や他型式の軒丸瓦の供給は行われなかったと推測される。

（4）丸瓦

丸瓦（10）の出土は1点のみで、鏡山報告資料として報告書に写真が掲載されている（鏡山1937）。斜格子文の丸瓦であり、詳細は前述したので、ここでは省略するが、出土点数の少なさから、瓦葺建物の主体として使用されたとは考えにくく、後述するように、平瓦が主体の瓦葺建物を想定する。

（5）平瓦・熨斗瓦

怡土城の採集資料及び発掘調査資料の中で、最も出土点数が多く、瓦葺建物の主体をなす瓦で、平瓦と熨斗瓦がある（11、12）。

平瓦は長さ39～43㎝、下端幅27～28㎝、厚さ4～6㎝と分厚いもので、怡土城専用の瓦として生産されている。摸骨桶造りのものと1枚造りのものがあり、前者の出土量は少なく、後者が圧倒的に多い。摸骨桶技法から1枚造りへと変化したのであろう。平瓦の1枚造りは、厚さの異なる粘土板を2枚使用して製作するものが主流で、中には粘土板1枚だけの薄いものも存在する。この厚手のものと薄手のものがどのように使い分けされていたか現在のところ不明である。

熨斗瓦は、粘土板を瓦笵に押し付けて製作した焼成前平瓦を半裁することで作られている。薄手の熨斗瓦は確認できないことから、厚手の熨斗瓦が瓦葺きとしては用いられている。

怡土城では、この厚手の平瓦と熨斗瓦が、大量に出土するため、これら瓦を主体とする瓦葺建物が想定されるが、その生産は怡土城付近で行われたと推測できる。平瓦は瓦葺礎石建物を建てる際に大量に必要とされるため、これを満足させるには、造瓦技術の改良と造瓦工人の確保が必要である。摸骨桶技法から1枚造りへの変化は、瓦の量産と省略化の結果と考えられる。

また、怡土城出土の平瓦・熨斗瓦は、怡土城築城に際して独自に創出された瓦であるが、還元焼成が不完全なものが多く、その生産において太宰府系工人が直接的に関与したとは考えにくい。怡土城築城にあたって集められた在地系工人による生産と想定される。

4．怡土城の終焉

怡土城の終焉については、これまでの発掘調査の成果から、最も新しい土器が9世紀初頭であり、これに近い時期が想定されている（瓜生2006）。参考に怡土城周辺遺跡を見ると、金武青木A遺跡（福岡市早良区）では、「怡土城擬大領」「専当其事」「別六」と書かれた木簡が出土しており、怡土城の人的・物的供給基地の役割を担うと考えられているが、7世紀後半から利用され、8世紀後半に

ピークを迎え、9世紀前半に廃絶される（加藤2012）。したがって、怡土城の廃城もその頃と理解できる。

この他、怡土城周辺では、怡土城系平瓦の出土が認められる。例えば、徳永A遺跡（福岡市西区）では、9～10世紀前半の掘立柱建物や鍛冶炉が見つかっており、中国系陶磁器（越州窯、邢州窯、長沙窯）が多く出土したことから、「主船司」と目されたが、現在では否定されている（森本2016）。この遺跡では、怡土城系平瓦が多く出土しており、9～10世紀前半と考えられている。また、潤地頭給遺跡や前原西町遺跡2次調査では、怡土城系平瓦を礎石に利用する掘立柱建物が確認されている。両遺跡とも時期は不明であるが、怡土城系平瓦の2次利用が想定できる。

このことから、9世紀初頭から前半に、怡土城が廃城した後に、怡土城系平瓦が建築部材として再流通・再利用していることが分かる。

5．おわりに

これまで、怡土城出土の瓦塼類について概観したが、大宰府指揮のもとに怡土城の築城が開始され、それに必要な瓦は、太宰府系瓦笵を用いた鬼瓦、軒丸瓦、塼と怡土城独自に創出された平瓦、熨斗瓦に分かれる。特に、平瓦は必要枚数が多く、その生産は怡土城付近で行われたとみるのが合理的であろう。

近年、怡土城周辺の発掘調査が進んでいる。元岡・桑原遺跡（福岡市西区）では、8世紀中頃～後半の製鉄炉が50基近く検出され、時期的にも怡土城への武器供給を行っていた施設と考えられる（菅波2005、2007）。また、金武青木A遺跡では、鍛冶炉や焼塩土器が大量に出土し、先の木簡などから、怡土城を巡る人的・物的供給施設と考えられている（加藤2012）。さらに、中原遺跡（唐津市）では、防人に関する重要な木簡（8号木簡）や相模型摸倣坏が出土している。8号木簡の1次文書には「甲斐国□戌□」、2次文書には「□暦8年」と書かれており、延暦8（789）年に肥前国に甲斐国や相模国などの東国の防人が配置されていたことを示している（美浦2009）。

このように、大宰府指揮のもと怡土城を巡る人的な配置や物的な供給体制が構築され、それらの施設が有機的に結びついていることが明らかになっている。

今後、怡土城出土瓦の生産や供給のあり方、怡土城の内部構造の解明など様々な課題が残されている。これらについては、今後の研究の進化に期待したい。

【参考文献】

井形進2018「大宰府式鬼瓦考－Ⅰ式Aを中心に－」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘50周年論文集刊行会編

石松好雄1993『筑前国分寺軒丸瓦考』論苑考古学　坪井清足さんの古希を祝う会編

瓜生秀文2006『国指定史跡　怡土城跡』前原市教育委員会

小田富士雄1970「観世音寺と国分寺」『古代の日本』角川書店

小田富士雄1981「北浦廃寺」（九州歴史資料館編『九州古瓦図録』柏書房）

鏡山猛1937『怡土城址の調査』（日本古文化研究所報告第6）日本古文化研究所

加藤隆也2012『金武青木－金武西地区基盤整備促進事業関係調査報告－金武青木A遺跡第1次調査、金武青木B遺跡遺跡第1・2次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1146集　福岡市教育委員会

九州歴史資料館2012『大宰府政庁跡』

菅波正人編2005『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書　元岡・桑原遺跡群4－第12、15、24次調査の報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第860集　福岡市教育委員会

菅波正人編2007『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書　元岡・桑原遺跡群8－第20次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集　福岡市教育委員会

角浩行（編）1995『Ⅲ．高祖榎町遺跡』「川原川右岸地区遺跡群Ⅰ　川原川右岸地区県営ほ場整備事業に伴う文化財調査報告」前原市教育委員会

主税和賀子2019「古代九州における造瓦技術の変遷」『平成30年度九州史学会考古学部会発表資料』

中村和博2008「筑前国分寺における瓦の生産体制」『九州考古学』第83号　九州考古学会

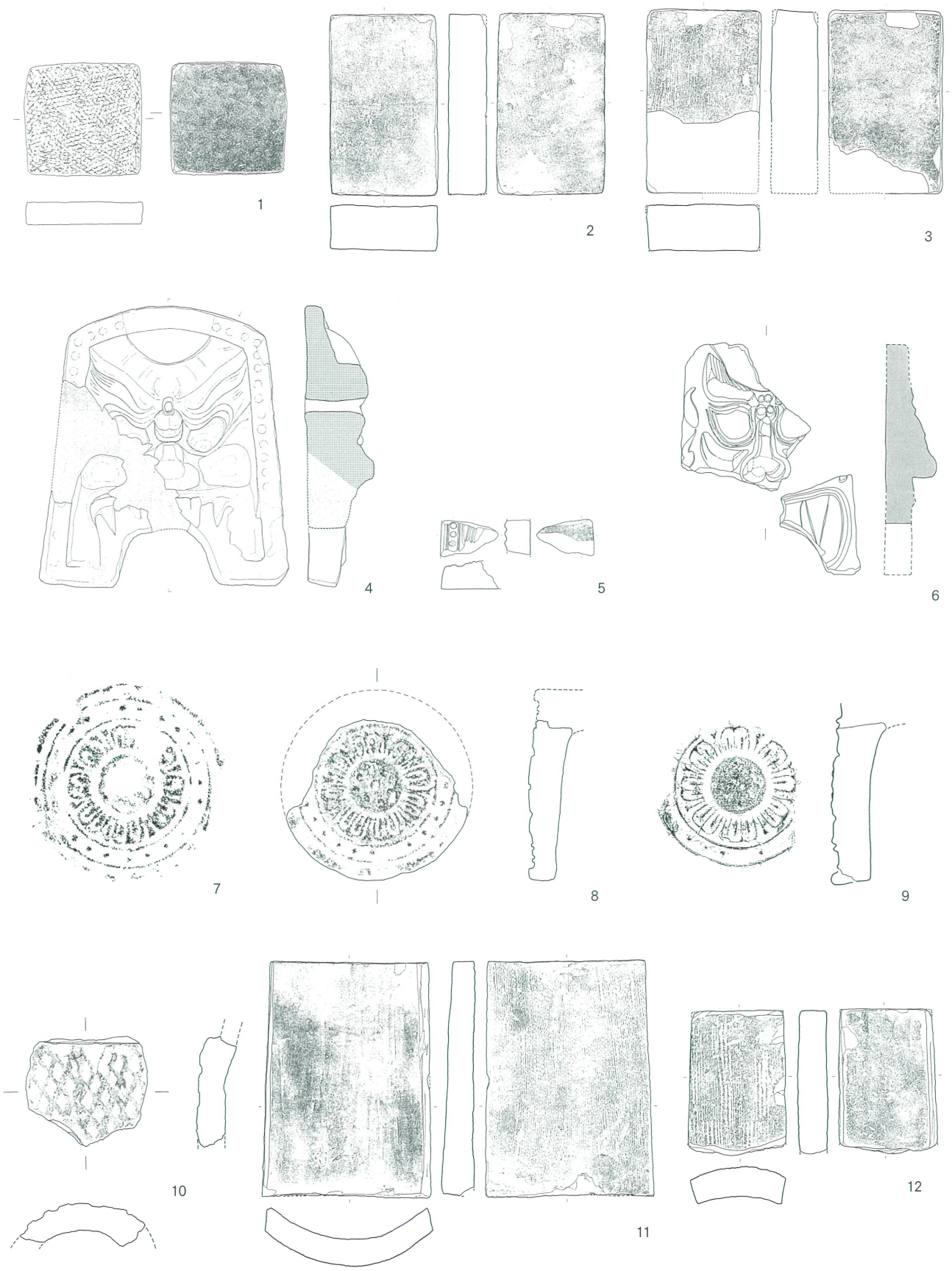
中山平次郎1916「古瓦類雑考（9）」『考古学雑誌』第7巻第4号

ブルース・バートン2007「大宰府・筑紫館（鴻臚館）の成立と歴史的意義」『古代の博多　鴻臚館とその時代』福岡市博物館特別展図録：132-135　古代の博多展実行委員会

美浦雄二2009『中原遺跡Ⅲ　5区の調査－西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書－』佐賀県文化財調査報告書第179集　佐賀県教育委員会

毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集』奈良国立文化財研究所学報38冊

森本幹彦2016「徳永A遺跡」『新修福岡市史　資料編考古Ⅰ　遺跡から見た福岡の歴史－西部編－』福岡市史編集委員会



第６図　怡土城出土瓦塼類実測図①（1/6）

写真１　末永出土鬼瓦（Ⅱ式）

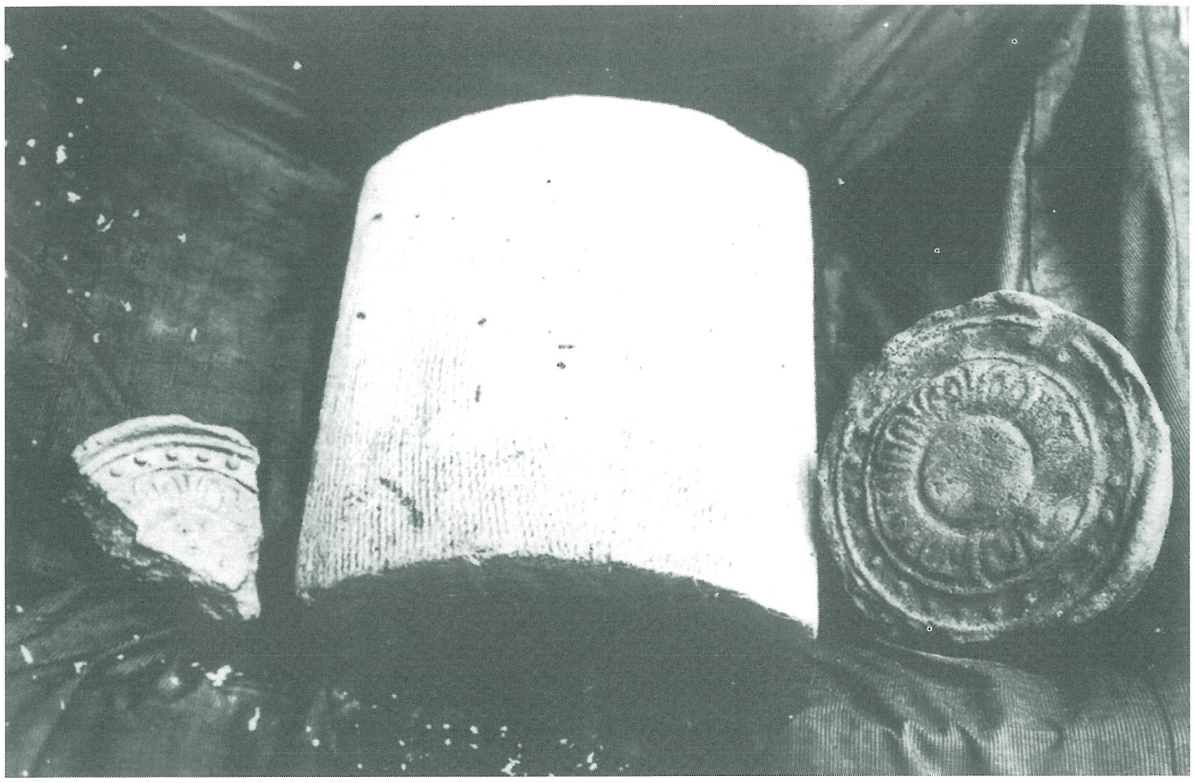
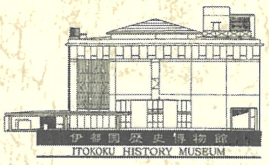


写真２　大圓寺所蔵平瓦・軒丸瓦



糸島市立　伊都国歴史博物館紀要

第14号

発行日　平成31年3月31日
発　行　糸島市立伊都国歴史博物館
〒819-1582
福岡県糸島市井原916
印　刷　城島印刷株式会社
〒810-0012
福岡県福岡市中央区白金2丁目9番6号
TEL (092)　５３１－７１０２